やはり俺のぼちキャン△は間違っている。

乱A

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中学時代、本物の関係を築けると思っていた比企谷八幡。

だが修学旅行で奉仕部が受けた相反する依頼を彼なりに解決した結果彼女達は彼を拒絶した。

話を聞いただけの妹も彼を責め、比企谷八幡は一人千葉を離れ、山梨を訪れる。

その地での出会いに彼は何を見出すのであろうか。

※俺ガイル原作の高校２年の出来事が中学３年におき、告白事件の後に八幡は奉仕部には寄り付かなくなったまま卒業し転校したという独自設定となっております。

※十二話目の最後の方を書き直しました。

この作品は作者のブログ「四人部屋」にも投稿しています。

目次

第一話「ぼっちとソロと遭難者」 1
第二話「鍋と夜のふじさん」 7
第三話「思いと思い」 18
第四話「折れたポールと関わり合い」 22
閑話「そして比企谷八幡のぼちキャンは始まる」 32
第五話「旧友と立ち直り」 39
第六話「野クル参加？」 49
第七話「キャンプめしとキャンプめし」 58
閑話2「スーパーカブのすれ違い」 70
第八話「キャンプ会議」 75
第九話「四尾連湖と電話」 83
第十話「四尾連湖キャンプと牛鬼オバケ」 90
第十一話「斉藤恵那は告らせたい」 106
第十二話「そして比企谷八幡と比企谷小町は」 119
第十三話「初顔合わせと比企谷家（仮）」 132
閑話3「スーパーカブのすれ違い2」

第一話「ぼっちとソロと遭難者」

アウトドアチェアに座り、ペラペラと一枚づつページを捲っていく。
此処は本栖湖のキャンプ場。俺は一人、湖畔でラノベを読んでいる。
寒さも焚き火の炎で温まる為の程好いアクセントである。
人気のキャンプスポットだが、季節外れと寒さも相まって、現在俺一人と貸しきり状態である。
シーズンオフマジ最高！
コンパクトバーナーで暖め直したＭＡＸコーヒーで喉を潤してラノベを読み、聞こえて来るのはチャプチャプと波の音だけ。
何これ？言う事無いんですけど！
俺もう此処に永住したい。
ピロンッ
そんな事を考えていたら、スマホからラインの着信音が鳴る。
通知相手は知った奴だ、知らない奴からだったら詐欺電話だよね。
俺、一体何を売りつけられちゃうの？

リ《おす、比企谷》
八《うす》
リ《比企谷も此処だったんだ》
八《まあな。富士山見たかったんだけどな》
リ《傘かぶってる、残念》
八《それ以外は概ね問題ない。じゃあな》
リ《うい》

そんな短いラインを終えた相手は少し離れた場所でテントを張り始める。
彼女の名は『志摩リン』
以前、別のキャンプ場で忘れて来た道具を貸し合ってからの付き合いだ。
お互いにボチ（ソロ）キャンが趣味という事もあり、時々キャンプ場が被った時などにこうやってラインのみの会話はよくする。
同じ学校の同級生ではあるが、学校では特に関わり合いになる事も無く会話する事も無い。
まあ、丁度いい距離だという事だ。

ー◇◆◇ー

ランタンの光の中で二冊目の中程まで読んだ時、焚き火の炎が揺れて薪がパチリと軽く爆ぜた音でふと気付くと、辺りはすっかりと暗くなっていてすぐさま尿意が襲って来た。

「おぉ～、マッ缶飲みすぎた。トイレだトイレ」

道路脇の公衆トイレまで上り、無事用を足して戻ろうとすると…

ヒック、ヒック

暗闇ではあまり聞きたくない啜り泣きが聞こえて来た。

やだ、聞き間違いだよね？

ねえ、お願いだからやめて。マジで怖いから。

ヒック、ヒック、ズズーーッ

あ、鼻水啜る音も聞こえた。

なら安心、幽霊って鼻水啜ったりしないだろう。しないよね？

そう思って横を向くと…

「えっぐ、えっぐ、えっぐ」

ランタンに照らされた怪しすぎる人影が浮かび上がった。

「うびゃあっ！」

驚いて逃げ出す俺をその怪しい奴は両手を突き出して追い掛けて来る。
何これ？怖い怖い怖い！
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！何だ何だ何だ何だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「うびゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
逃げても逃げても奇声を挙げながら追い掛けて来る。
怖い怖い怖すぎる！
「べとべとさんっ！お先にどうぞおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
「びゅえええええええええええええええええええんっ！」
くそっ！この呪文でも駄目とは、所詮は都市伝説か。
後ろを振り向くと奴は付かず離れずで追い掛けて来るが、振り向いたのが悪かったのか足をもつらせて転んでしまった。
「ぐへっ！」
そのまま這いずりながら逃げようとするが飛び付かれ、恐怖に駆られながらあお向けに向き直ると、そいつはずりずりと這い上がって来る。
べとべとさんじゃ無く、テケテケさんだったのかぁ～～。
やめてやめて、這いよらないで！
「ひ、ひええ、ひえぇぇぇ」

「まっでえぇ～～～、まっでよおぉ～～～～」
「ひいい…、お?」
なおも這い上がって来るそいつの肩を掴み追い返そうとすると、そいつは妖怪などでは無く桃色の髪の女の子だった。
「ふえぇぇ～～、ぐしぐし」
「な、なんだ。びびったあぁ」
正体が分かり一息吐いているとカサリと誰かの足音が聞こえた。
まあ、誰かは分かっているんだが、見下ろすその顔を見れば案の定、志摩だった。
「おい、何してる?」
怪訝な表情を浮かべそう聞いて来る彼女の手にはスマホが握られていた。
「何してるも何も…おい、今スマホに打ち込んだ三桁の数字をすぐに消せ」
「え?だって誰が見ても」
「位置が逆なら兎も角、圧し掛かれているのはどう見ても俺だろうが」
「それもそっか。あれ、その娘」
「ふぇ」
知り合いなのか?と聞こうとすると、その娘からこの状態ではあまり聞きたくない音が鼻の辺りから聞こえて来た。

「お、おい。まさか…」
「ふえぇ、へ、へ、へ、へ」
「や、やめろ！落ち着け慌てるな早まるな話せば分かる」
だが、残念ながら話しても分からなかった様だ。
「ぶえぇっくしょいっ！」
「うぎゃあぁーーーーーーーっ！」
「うわぁ…」

本日の天気
曇りのち晴れ・時々涙と涎と鼻水の絨毯爆撃。

第二話「鍋と夜のふじさん」

「えぐっえぐっえぐっ」

悲惨な爆心地となった顔を公衆トイレの手洗い場で洗い、取り合えず俺のテント前に集まったが件の少女は未だ泣き続けていた。

いや、連れて来たんじゃなくて女同士、志摩のテントに行くのかと思っていたら何故か彼女は俺の服の裾を掴んだまま後に付いて来るので必然的に志摩も一緒に来た訳だ。

「つまり、今日山梨に引っ越して来て富士山を見ようと自転車で此処まで来たけど疲れて眠っていたら辺りは真っ暗闇になってて途方に暮れていたと」

「ぞうなりなず〜〜。ぐしぐし、ずず〜〜」

二人のそんな会話を聞いていた俺は「はぁ〜」と溜息を吐いた。

あ、別にクソでかくないよ、念のため。

「と、言うか眠りこけていた事に気付いていたんなら注意してやれよ」

「そこは面目ない。まあ、あっちは下り坂だし、下まですぐだと思うけど」

「むりむりむり、ちょうこわい！」

まあそれはそうだろう、俺だって怖い。
「だったら家に電話して迎えに来てもらえば？」
「あっ、そうか！」
俺の提案にその手があったかと、彼女はスマホを取りだそうとポケットに手を入れる……が。
「スマホスマホスマホ、最近買ったスマホスマホスマホス」
中々見つからないのか体中のポケットを弄り…
「マホッスーー」
取り出したのはケースに入ったトランプ（５２枚入り）だった。
何故それを携帯する？
呆然とする俺達をよそに、彼女の腹の虫が盛大に音を鳴らす。
ぐうぅぅぅ～～～～～
「あうぅ～～」と唸りながらｏｒｚになる彼女、哀れすぎる。
「…今から飯作るけど喰うか？」
「いいんですか！」
「税込み１５００円になります」
がま口を取り出し中身を見ると１００円玉を差し出し…

「じゅ、じゅうごかいばらいでおねがいしましゅ～～」
泣きながらそう言って来た。
「鬼か、貴様」
「嘘に決まってるだろ。それから志摩、お前も食ってけ」
「いいのか？」
「お前だけのけ者にしたら後味悪いじゃねーか」
「じゃあ、椅子取って来る」
志摩は自分のテントに椅子を取りに行き、俺はコンロを取り出すと鍋を乗せて水を注ぎ、火を点けてから飯盒を焚き火にかける。
「お鍋だーー」
さっきまでの泣き顔は何処へやら、途端に満面の笑顔になり、椅子を持って来た志摩に「お鍋だよー」と言い志摩も「そうだな」と返す。

ー◇◆◇ー

「おっなべー♪おっなべー♪」
「ごっはんー♪ごっはんー♪」
ぐつぐつと煮える鍋と湯気を出す飯盒を見比べ、頭を揺らしながら歌う彼女。

腹の虫は相変わらず大合唱だが実に楽しそうなその姿に思わず笑みが零れる。
ふと視線を感じ、横を向けば志摩が生暖かい目で見ていた。
「…何だよ」
「別に」
「そういえばご飯を炊く時の歌ってあったよね。たしか…そうだ！『赤～子焼いてもふた取るな』」
「『赤子を焼くな!!』」
「へうぅっ！」
「まあ、私のスマホで連絡してあげるから家の電話番号教えて」
「引っ越したばかりで覚えておりません」
「じゃあ自分のスマホの番号は？」
「記憶にごじゃいましぇん」
ぐうぅぅぅ～～～～
「あうぅ～～」
「ねえ、あなた何処から来たの？」
「私？ずーっと下の方、南部町ってとこ」
「よく来れたな」

「だってふじさん見たかったんだもん、お姉ちゃんが千円札の絵にもなってるって言うからながーい坂えっちらほっちらと登って来たのに真っ暗になっちゃうし雲に隠れてるし…見たかったなぁ」
「そうだな、俺も富士山が見たくて此処でキャンプしてたしな」
「そうですよね、そうなんですよ奥さん」
「誰が奥さんだ」
「見えないって、あれが」
志摩はくすりと笑いながら指を指す。
俺と彼女はその指を指す方向に目をやると…
「ほう」
「うわぁ～～」
何時の間にか山頂を覆っていた雲は晴れ、その雄大な姿は月の光に照らし出されていた。
「ふじさん、きれいだｎぐううううううう～～～～あう」
腹の虫が今まで以上に鳴り響き、再び気落ちする彼女だが漸く煮えた鍋の蓋を取るととたんに満面の笑みになる。
やだ、何この可愛い生き物。

「ほれ」
「えへへぇ～。おいしそー」
使い捨てのお椀にお玉で注いで渡してやるとふーふーと息を吹きかけて冷まし、はふはふと食べる。
「にんじん、はくさい、ねーぎ、おさかなー♪」
彼女の鼻歌を聴きながら俺と志摩も食べる。
そー言えば誰かと飯を食うなんて何時以来だ？
「美味いな」
「そりゃどーも。まあ、あらかじめ切っておいた材料をコンソメと一緒に煮ただけのお手軽料理だけどな」
「それでも凄いよ。私は何時もカレー麺ばっかだから」
「俺だって普段はカップ麺の種類を変える位だ。今日は偶々だよ」
ほんと、こーやって誰かと飯食ったりキャンプしたりするのも悪くないな。
今度は志摩も誘って……。
いやいや、勘違いをするな馬鹿か俺！また間違いを繰り返すつもりか。
誘った所で嫌な顔をされて拒絶されるのがオチだ。
せっかく丁度いい距離感でいるんだ、さっき自分で言った様に今日は偶々だ。

またあの絶望を味わう位なら…「ごちそうさまーーー！」…「へ？」
手を合わせる彼女から目線を下に下ろして鍋を見るとすでにすっからかんであった。
「い、何時の間に」
「えへへ～、美味しかった～」
「〆に雑炊しようと思ってたのに」
「あっ、そうだよ。お鍋といえば〆の雑炊だよー」
よくよく見れば飯盒の中身もからっぽだった。
「うぅ～～、雑炊食べたかったぁ」
「ほとんど食い尽くしておいてまだ食えるのか。悟空かお前は」
「え？私なでしこだよ。あ～～～っ！」
「な、何だ？」
「どうした？」
突如叫び、立ち上がった彼女は。
「えへへ～～、お姉ちゃんの番号覚えてたよ～」
頭を掻き、照れながらそうのたまった。

「お、お、お、お、お、お、～～～」
頭の上に二段のたんこぶをこしらえた彼女が痛みに耐えながら蹲っている。
「うちのバカ妹がほんっとう～～にご迷惑をおかけしました」
その後、車で迎えに来た彼女の姉は申し訳なさそうに頭を深く下げた。
「い、いえ…」
「おかまいなく…」
「このお馬鹿！携帯しなきゃ携帯電話とは言わないのよ！」
「うう～、携帯電話じゃなくスマホだよぅ～～」
「あ、あ、っ!?」
「うぎゃぴぃっ！」
だんご三兄弟の誕生である。
「おら！さっさと乗れこのブタ野郎！」
「いだっ！や、やめれぇ～～、お鍋がでりゅう～～」
車に押し込まれた挙句、姉にキックの連打を受ける彼女を俺達は生暖かい目で見るしかなかった。
「あの、せめてのお詫びですがよかったらどうぞ」

助手席のドアを勢いよく閉めた彼女の姉が差し出して来たのは袋一杯のキウイであった。
「あ、どうも」
「じゃあ、私達はこれで。風邪、引かないでくださいね」
車に戻って行く姿を見送り、鍋がキウイに化けたな～と思いつつテントに戻ろうとすると
「ちょっと待ってーー」
と、彼女が駆け寄って来た。
「はいこれ、私の番号」
俺と志摩に差し出した紙に書かれていたのは彼女の名前とスマホの番号だった。
「お姉ちゃんに聞いたんだ。お鍋美味しかったしそれに…」
彼女は俺から視線を志摩に移し
「ふじさん、とーーっても綺麗だった！またキャンプやろーね、じゃーーねーー」
満面の笑みでそう言い、車に戻って行った。
「ヘンな奴だったな」
「比企谷程じゃない」
「さいですか。ほれ」

「ん？」

貰ったキウイを五個ほど抜き取り、残りを袋ごと志摩に渡す。

「比企谷が貰ったんだろ」

「俺は一人暮らしだからそんなに食えん。持って帰って家族で食えばいいだろ」

「まあ、そういう事なら」

志摩はうっかりと言ってしまった〝一人暮らし〟という所には踏み込まずに素直に受け取る、そこはありがたい。

テントへと戻りながら俺はさっき受け取った紙に目を下ろす。

其処に書かれていた番号と名前。

《各務原なでしこ》

志摩も同様に見ていたらしく

「登録だけはしといてやるか」

と言い、スマホに番号と名前を打ち込んでいる。

「これ、俺も登録していいのかな？後でストーカー呼ばわりされて通報されたりしないかな？」

「面倒くせぇな、お前」

「ごめんなさい」

番号を登録した所で其々お互いのテントに戻って行く。
「じゃな、鍋美味かったよ。お休み」
「おう、おそまつさん。お休み」
テントに戻り、鍋などの道具の後始末は明日にする事にして焚き火の火を消し寝袋に入って目を閉じた所で大事な事に気が付いた。
「あれ？そう言えば……何で俺、普通に会話してたんだ？」

第三話「思いと思い」

月曜日、また苦難の一週間が始まったが何とか放課後にまでこぎつけた。
クラスの連中も其々帰ったり部活に行ったりするが、挨拶などしても返っては来ないのであえてしない。
はいはい分かってますよ、コミュ障コミュ障。
通学に使っている電車でもたわわな展開が起こる訳なども無く、どちらかと言えばうんじゃらげである。
改めて思うけどうんじゃらげって何だろう？
…もう一回観たいな～、早すぎたよなやっぱり。
何だかこのまま帰る気にはなれず、ベストプレイスでマッ缶飲んでまったりするかと鞄を掴んで扉に向き直ると廊下を歩いている志摩が見えた。
何やら本を読んでいるみたいだが気を付けないと誰かにぶつかり、嫌な顔をされた挙句教師を呼ばれて職員室で説教を受けるまである、ソースは俺。
嫌な事件だったね、まあ其処まで無用心じゃないしわざわざ注意する程の事でもない

か。

一昨日は結構会話をしたが、今朝も通学途中の坂での挨拶はお互いに「よう」「おう」の二言ですんだ。

うん、あれで仲良くなったと勘違いして話しかけないで良かったよ、うん。

正直に言えば楽しかったしもう一度とも思うが、もし拒絶されたら…。

だからこの距離を保って〝知り合い〟のままでいれば傷つかずにすむ、絶望なんかせずにすむんだ。

志摩〜〜

ふむ、トマトジュース一缶にコンソメ一個、野菜は予めカットしておくと。なるほど、コッヘル一個あれば出来るのか。カレー麺も飽きたし…、比企谷の鍋も美味かったし今度やってみるか。

鍋…、そう言えばラインはよくするけど比企谷とちゃんと話をしたのは初めてだったな。

以前、持って来るのを忘れた道具をお互いに貸し合ってからの付き合いで、ラインも道具を返す時に連絡する為に交換し合った物。

比企谷もソロキャンが趣味らしくその後も時々キャンプ地がかち合った時に二言、三

言のラインでの会話をする、その程度の間柄。
キャンプ地に着いた時、既に比企谷のテントがあった時や後れてやって来た時などは妙な安心感を感じていたしテントを張る時も近づき過ぎず、離れ過ぎず、お互いのテントが視界の端に映る距離を自然と保っている。
そんな距離が寂しいながらも安心感もあった。
だけど各務原なでしこ、一昨日のソロキャンでの彼女の乱入で比企谷とは初めて会話らしい会話をした、しかもごく自然に…正直楽しかった。
比企谷八幡、あいつと私は似ている様で違う、違う様で似ている。
私は基本一人が好きだ、だからと言って一人で居たい訳でもない、斉藤とのラインや話も楽しい。
そして比企谷も一人で居る事を好んでいる節があるがそれは何だか違う気がする。
ラインをすればちゃんと返して来るし、一昨日だってごく自然に会話が出来たという事は一人で居たい訳では無いのでは無いか？
何と言うか、一人で居ると言うより一人で居なければならないという様な強迫観念みたいな物を感じる。
今朝だって話しかけようとはしたがそれを拒む気配みたいな物を感じたので「よう」と言えば「おう」とあっさりと返し、それで終わってしまった。

一人暮らしだと言っていたが一人で居ようとする事を望むのはそれも関係しているのだろうか？
聞くのは怖い、それを聞けば比企谷は私を拒む気がする。
そう、私は何故か彼との関係が壊れてしまうのが嫌なのだ。
壊れる位なら…、比企谷がそれを望んでいるのなら…。
この距離を保った〝知り合い〟でいよう。

第四話「折れたポールと関わり合い」

なでしこ～

「ぶっしつっとう～～、ぶっしつっとう～～」

一昨日、引っ越して来たばっかりだったけどわたしは自転車に乗って富士山を見に行った。

でも雲が邪魔で見えなかったからベンチで雲が退くのを待っていたら疲れていたので何時の間にか寝ていて、目が覚めたら辺りが真っ暗だったのでとっても怖かった。

どうしよう…と思っていたらトイレから男の人が出て来たので助けてもらおうとしたら突然逃げ出した、何故だったんだろう?

でもここでまた一人になったらもう家にも帰れないと思って必死に追いかけた。

その後、色々あったけど…はうぅっ（赤面）

結局その人は助けてくれてもう一人の女の子と一緒にお鍋まで食べさせてくれた、美味しかったなぁ。

そして女の子の指差す方を見ると富士山が見えた、すっごく綺麗だった。

あれが切欠でわたしはキャンプという物に引かれた。

「あった、ぶしつとう！」
目指すのは野外活動サークル。
この学校には二つのアウトドアの部活があって、一つは登山部。
でもこの部活は体育会系でキャンプより登山がメインらしいので、まったり系なこっちの方がわたしには合っている。
みんなでテント張ったり、料理作ったり、たき火して夜更かししたりのまったりアウトドア、楽しみだなーー。
「こんにちわー」

＝そして彼女の「野外活動サークル」通称・野クルメンバーとの交流は始まる＝

志摩〜
「お？」
図書委員の仕事をしながら、アウトドア料理の本を読みつつふと窓の外を見ていると見た事のある桃色の髪があった。
あいつ、此処の生徒だったのか。
ほかの二人と一緒にテントを張ろうと悪戦苦闘している、たしか野外活動サークル

だったか？
「何、リン。あの娘達気になるの？」
「いや、別に」
　あいつとは偶然会っただけだし、一緒にキャンプしてくれる仲間も出来たみたいだし態々関わる必要も無いだろう。
「よし、クマヘアー完成」
「おい止めろ」
　こいつは斉藤恵那、一人でいる事を望む私にとって、気のおけない友人である。
　私の髪をセットしてくれるのは助かるが、時々こうやってオモチャにしたりする。
「あらら、何か手間取ってるみたい。リンあーいうの得意じゃん、手伝ってあげたら」
「めんどい」
「まったくもー」
　そう言われつつ、見てみるとたしかにポールを固定するのに手間取っている。
　ああ、そんなに無理やり曲げると…
　折れた。
「あ、折れちゃった。あれだとテント張れないよね、ああいう場合どうするの？」
「まあ、メーカーに送って修理かな。でも折れた部分を繋げる輪っかみたいのがあれば

応急修理は出来るけどね」
「こーいうの？」
「なぜ持ってんだよ」
「落し物箱にそれっぽいのが入っていたから。リン、これ持って行って助けてあげなよ」
「え～～」
「うわ、すっごい嫌そうな顔。じゃあ私が持っててってあげるよ」
「うい」
おせっかい焼きめ。
同じ学校だとばれるとめんどくさそうだから余り関わらないようにしよう。

八幡～
中庭への出口ではあるが裏口の為、余り人の来ないベストプレイスでマッ缶飲んでいたらジャージを着込んだ三人の女生徒がやって来た。
どうやらテントを張ろうとしているらしい。
よくよく見ればその内の一人、ピンク髪の女の子は一昨日遭難していた娘じゃないか。

たしか各務原とかいう名前だったな。
誰だよ、ソウナンですよと突っ込んで来たのは。
誰でもない一人ツッコミでしたね、ごめんなさい。
何、もう友達出来たの？
春に入学して今１１月だけど俺、友達一人も居ないよ。
志摩はまあ、同じ趣味を持った知り合いって所だ、向うもそんな認識の筈だ。
わちゃわちゃと騒がしいので見てみるとポールを固定するのに手間取っているらしい。
もう一度落ち着いて張り直した方が…、いわんこっちゃない、折れた。
いや、言ってないけどさ。
どーすっかなー、関わると絶対面倒くさくなる案件だよなこれ。
「あれ？確か…比企谷君だよね？」
「うおっ!?」
「あ、ビックリさせちゃった？ごめんね。私は斉藤恵那、よろしくね」
斉藤恵那、たしか志摩とよく一緒にいた奴だよな。
学校では関わらない様にしていたから名前なんか知らなかったが志摩に聞いたんだろう、俺の事は知っているらしい。

「ねえ、比企谷君もキャンプをするんだよね。じゃあコレの使い方知ってるよね」
そう斉藤とやらが差し出して来たのはポール補強用パイプ。／よう／
なるほど、コイツで折れたポールを直そうって訳か。
「折れたポールをコイツで繋げてガムテなんかで補強すれば良いだけだ。どうせ志摩にやり方教えてもらったんだろ」
＝比企谷は逃げ出した＝
「でもやっぱり経験者から教えてもらった方が解りやすいよ」
＝しかし、回り込まれてしまった＝
「だがな、それはあれだしどっちかっていうとなにだから…」
「もー、いいから。ほら、あの娘達困っているから早く行こうよ」
腕を掴まれ、引っ張られる方を見るとあのピンク髪の少女は折れたポールを掴んで「ふええぇ～～ん」と泣いている。
一応嫌そうな顔をしながら斉藤を見上げると〝断らないよね〟とでも言いたげな笑顔だ。
俺は「仕方ねーな」と溜息を付きつつ立ち上がる。
あ、今度はクソでかいよ、念の為。
そして斉藤が「おーーい」と呼びかけた彼女達が此方を向くと…

「あーー、お鍋の人だー！」
　と満面の笑みを見せる。
「お鍋の人？」
「あー、本栖湖で行き倒れた時に鍋を食べさせてくれた人やな～」
「名前は？」
「え～と、そういえば聞いてなかったよ」
「おいおい」
「じゃあ自己紹介からいこか～。私は犬山あおい」
「あたしは大垣千明」
「わたしは各務原なでしこです」
「私は斉藤恵那、そして」
　斉藤がこっちに向き直ると他の三人も俺を見る。
　あれ、これ俺も自己紹介しなきゃいけない流れ？
　各務原はキラキラした目で見つめて来て、犬山と大垣とかいう二人も興味津々といった感じだし自己紹介された以上こっちも名前を教えるのは礼儀だろう。
「ひゅき…比企谷八幡だ」
「噛んだ」

「噛んだなぁ」
「噛んじゃったねぇ」
仕方ないだろ、自己紹介なんて慣れてないんだし噛んじゃってもいいじゃない、八幡だもの。
あ、自分で自分の事八幡呼ばわりしちゃったよ、泣いてもいいかな？
「比企谷…八幡、ねえ八幡君！」
「ひゃっ、ひゃい？」
「また噛みよった」
「なんで電話してくれないの？」
「へ？」
各務原は頬をぷくーっと膨らませて見つめて来る。
どうやら俺と志摩からの電話かラインが来るのを待っていたらしい。
「いや、それはなんだ…。それよりポールが折れたんだろう、貸してみろ」
「え、なおせるの？」
俺が手を出すと持ってたままだった折れたポールを差し出して来る。
よし、誤魔化せた。
パイプで繋げ、ガムテで固定したポールで再度テントを張り直すと今度は無事に張る

事が出来た。
「やったーー♪」
「どーなるかと思うたけど何とかなったなー」
「９８０円だけどちゃんとテントしてるな」
「ありがとねー、八幡君」
「お、おう…」
各務原は笑顔で俺の手を掴んで礼を言って来るし、何時の間にやら名前呼びが定着している。
他の三人も笑いながらこっちを見てるし。
おかしいな、何で各務原が関わって来るとこうなるんだ？
一昨日だって何時も通りに……あれ、そもそもこうなったのは斉藤が志摩にポールの直し方を聞いて来て偶々此処に俺が居たからで…志摩？
「しっかし助かったぜ、一時はどーなる事かと」
「あんがとなー、比企谷君に斉藤さん」
「いえいえ、私は何もしてないよ。直したのは比企谷君だし」
「その補強用パイプを持って来る様に言ったのは」
そして俺と斉藤は窓の向こう側を指を差す。

「おお、しまりんじゃねーか」
「志摩リンな。続けて言うとなんやゆるキャラみたいやで」
「リンちゃん！」
一人だけ逃がさねーぞ。

志摩〜
比企谷が斉藤に引きずられて行き、嫌々ながらも結局ポールを直すのを手伝っている。
これもあの時に解った事の一つ。
めんどくさそうにしながらも比企谷八幡は、困っている人を見捨てられない。
何故なのか、知りたい事がまた一つ増えた。
そんな事を考えていると比企谷と斉藤がこっちを向いて私を指差す。
…口元が笑っている。
「おい」

閑話「そして比企谷八幡のぼちキャンは始まる」

『あなたのやり方、嫌いだわ』
…だったらお前のやり方って何だったんだよ。
『もっと人の気持ち、考えてよ!』
…お前は俺の気持ちを考えてくれたのかよ。
『お兄ちゃん、雪ノ下さん達に謝って!』
…小町はあの二人の事は信じられても俺の事は信じられないんだな。

「またこの夢か」
最悪な夢見で目覚め、起き上がると其処にあるのは未だに見慣れない部屋。
此処は千葉の自宅では無く山梨にある爺ちゃんの家。
本栖高校への入学を数日後に控え、俺は馴染み始めたキャンプ道具に目をやる。

―◇◆◇―

あの出来事以来、俺は人の告白を邪魔するクソ野郎と詰られたりしたが、それに関しては戸部が「俺とヒキタニ君の事っしょ！お前らには関係ねーべ！」と庇ってくれたので暴力沙汰には発展しなかったが、それでもやはり異物扱いは変わらなかった。

戸塚や材木座に川崎は変わらずに接してくれるが俺の方が引いている為に何処かぎこちない、あいつらまで巻き込みたくないからな。

そして奉仕部には寄り付かなくなった俺に由比ヶ浜は突っかかって来るが、さらに腐った目で睨み返すと一旦は引き下がる。

まあ、それを何度か繰り返すと近づいて来さえしなくなったが。

雪ノ下も態々会いに来る訳も無く、結局俺達の関係はあの日に壊れたままだった。

小町とは一緒の家に住んでいるからか多少の歩み寄りはあるものの、やはり元通りとはいかずにいたある日母親に、『八幡、あなた山梨に行きなさい』と言われた。

「言っておくけど別にあなたを追い出すっていう訳じゃないからね。このまま総武の高等部に進んでも事態が変わる訳でもないんでしょう？」

「そりゃあ…まぁ」

「だったら別の土地に行って一旦、頭の中入れ替えなさい。このままじゃあなた、どこかが壊れちゃうわよ」

「…もう、壊れてるかもな」

そう、あいつらとの関係と一緒に〝何か〟が壊れてしまっているのだろう。
彼女達となら掴めると思っていた本物と一緒に……
「だったら尚更よ、その壊れてしまった物を補える〝何か〟を探しなさい。そしてそれは此処では無理なんでしょう」
「でも、何で山梨に?」
「中谷のお爺さん、覚えているでしょう」
「ああ、お袋の父親だよな。爺ちゃんがどうしたんだ?」
「今度兄さん夫婦と暮らす事になったのよ。ほら、お母さんが亡くなって三年経つしお父さんも体が弱くなっていたしね」
母方の祖父で、名前は中谷奏八。
子供の頃は休みには爺ちゃんが住んでいる山梨に良く遊びに行っていた。
行く度に爺ちゃん達は俺と小町をキャンプに連れて行ってくれそれがとても楽しかった事を覚えている。
「でもそれじゃお父さんの家が空き家になっちゃうからね、八幡が管理してくれる代わりに住んでも良いって」
「あの家か」
お袋の実家である爺ちゃんの家は平屋で結構古いが爺ちゃん達の管理が上手かった

のか今でも無理なく住めるらしい。
「まあ、此処にいても状況が良くなる訳でもないしな。分かったよ」
「後の事だけど父さんは…、反対はしないか。小町とはお互いに少し離れた方が良いかもね」
「俺もそう思う」
やっぱり妹だからな、あの二人とは違い小町の事は拒絶出来ない。
だが、今のままでは元通りになる事は無いだろう。
ならばお袋の言う通りに一旦離れてお互いがいない場所で考え直す時間が必要だ。
「じゃあ、山梨に行くって事でいいのね？」
「ああ」
「だったら」
そう言いお袋は数冊の参考書を俺の前に置く。
「入学試験の準備ね」
「にゅうがく…しけん？」
「エスカレーター式だから高等部にはそのまま進学出来たけど、別の学校に行くなら試験は必要よ。まあ、八幡なら大丈夫でしょう、数学以外なら」
数学？すうがく？数の学問で数学？

よくわからない式、むずかしい数式、記号だらけ、一年生の時に習ったやつ
うっ、頭が…
「ちょっと、本当に大丈夫?」

ギリギリ何とかなりました。

ー◇◆◇ー

そして、中等部を卒業すると同時に俺は一人山梨へと引っ越した。
最後まで小町とは会話らしい会話は出来なかったが今は仕方が無い。
爺ちゃんの家に着き、預かっていた鍵で家の中に入ると家具や家電などは一式揃っていた。
お袋が持って行くのは自分の細かな荷物だけでいいと言っていたのはこうい事かと、部屋の中を見回していると爺ちゃんから電話がかかって来た。
『八幡。どうじゃ、着いたか』
「爺ちゃん、丁度着いた所だよ。でもいいのかな?家具とか家電とかも丸々貰っちゃって」
『かまわんよ。家ってのは管理しとかないと直ぐに駄目になってしまうし、家具なども

婆さんとの思い出が詰まっとるが持って行っても邪魔になってしまうだけじゃからな、八幡が使ってくれたほうがええ。ああ、それとキャンプの道具やカブも使ってやってくれ』

「キャンプ？でも俺、一人じゃやった事ないし」

『まずはデイキャン、近場で日帰りキャンプから始めるとええ。何、魅力に取り付かれれば止められんようになる。ワシがそうじゃったからな』

「そうだな。爺ちゃん達とのキャンプは楽しかったし、試しに今度やってみるよ」

『おう、そうしろそうしろ』

その後、爺ちゃんとの電話を終えた俺は倉庫に行き、キャンプ道具を確認する。

子供の頃に一緒に使った大きなテントもあれば婆ちゃんと使ったであろう普通サイズのテントもあった。

スーパーカブはまだ免許が取れないので乗れないが、自転車があるのは助かった。

「さてと、試しに今度の休日にデイキャン？とかいうのをやってみるか」

そして、やって見たはいいものの、折り畳んでいた形が似ていた為にテーブルを忘れ焚き火台を二つ持って来た八幡、それとは反対にテーブルを二つ持って来た志摩。

お互いの道具を貸し借りした事から「ぼちキャン」と「ソロキャン」、二人の交流は始まったのである。

第五話「旧友と立ち直り」

さてと、どーしてこーなったんだっけ？

今、俺達は図書室に集まっている。

というのも各務原が志摩を見たとたんに「リンちゃーーんっ！」と駆け寄り、ベタンッ！と窓ガラスに激突したからだ。

「あうぅ～～」と痛みに耐えながら蹲る彼女を見かねたのか志摩は中に入って来る様に勧め、野クルのメンバーも一緒に付いて行く。

俺はステルスヒッキーを発動させてこっそりと帰ろうとしたのだが腕を斉藤に摑まれ、志摩の目も「逃がさん…お前だけは…」と睨みつけていたので逃げられなかった。

「えへへ～～、二人共同じ学校だったんだね」

「まあ…な」

「ああ」

「あのね。私、野外活動サークルに入ったんだ。八幡くんとリンちゃんも一緒に入らな…」

俺と志摩の嫌そうな顔を見た各務原は言葉に詰まる。

「ごめんな。別に各務原と一緒が嫌だって訳じゃないんだが、俺も志摩も一人でのんびりやるのが好きなんだ」
「私もごめん。好意で誘ってくれたのは分かるんだけど」
「ううん、いいの。わたしもちょっとテンション上がちゃってて、無理に誘ってごめんね」
各務原はえへへと笑いながら頭を掻いているがやはり残念そうだ。
うん、ちょっと心が痛むな。
「まあ、その内にね」
「お、おう。気が向いたら…な」
志摩と一緒にそう言うと、各務原は〝ぱあぁっ〟と笑顔を輝かせる。
やだ、やっぱりこの子可愛い。

ー◇◆◇ー

その夜、食事を済ませて録画したプリキュアを見ているとスマホがピロンとラインの着信を告げる。
相手は…我が心の天使、トツカエルこと戸塚である。

戸《八幡、久しぶり》
八《ひ、久しぶりだな戸塚》
戸《うん。そっちはどんな感じかな》
八《何とかやってるよ。そっちはどうだ》
戸《交流試合の三連戦、何とか勝ち越したよ。忙しくて中々返事出来なくてごめんね》
戸《あ、それとこの前の富士山の写真、すっごく綺麗だった。夜の富士山ってあんなに神秘的なんだね》
八《それな。何度見ても飽きないまである》
戸《いいなー、僕も一度見てみたいよ》
戸《それと八幡、新しい友達出来た？》
八《いや、新しいも何も友達出来た事ないし》
戸《え、志摩さんって娘は？》
八《あいつはその…同じ趣味の知り合いだし》
戸《八幡ってばもー》
川《ただの知り合いならそんなにちょくちょく会話に出て来ないだろう》
八《うわっ！な、何だ、川なんとかさんか》

川《…ちょっと、歯ぁ食いしばりな》
八《や、やめてやめて。お前の場合、本当に拳が飛んで来そうだから》
戸《あはは》
川《で、どうなの？》
八《まあ、最近ちょっとした切欠で会話が増えた…かな？》
戸《ちょっとした切欠って？》
八《それはあれがあれで》
川《歯ぁ》
八《ごめんなさい、ごめんなさい。一昨日のキャンプで変な子と知り合って》
戸《変な子？》
八《各務原なでしこって子なんだけど、彼女が関わって来るとなんていうかこう、調子が狂うっていうか》
川《結局何なの？》
八《普通に会話してるんだよな。自分でも不思議な位に》
戸《へぇ、良かったね八幡》
八《何が？》
川《リハビリは順調って事だよ》

八《リハビリって、俺は別に病気じゃないぞ》
川《……》
戸《……》
八《ごめん、無言は止めて無言は。心が痛いから》
戸《とにかく、そういった関係は大事にしなよ八幡》
材《うむ、人間関係は大事であるぞ八幡よ》
川《あ、それと富士山の写真、他にもあったら送ってよ。けーちゃんが見たがってるんだ》
八《分かった、色々見繕っとく。じゃあ、お休み》
戸《お休みーー》
川《じゃあね、お休み》
材《あ、あれ？我は？我との会話のキャッチボールは？》
八　画像
（自爆スイッチを押すヒイロ）
材《ちょ、ちょっと八幡？はちまーーーん》

ー◇◆◇ー

「大事にしろ…か」

各務原のアドレスをみながらそう呟き、そのまま志摩のアドレスに移る。

「解っちゃいるんだがな」

待ち受け画面に戻したスマホをテーブルの上に置き、台所に行くと洗っておいた鍋を見つめる。

何時もはカップ麺だが、その日は何となく鍋が喰いたくなったので材料を切り分けて持って行った。

其処で各務原と出会い、志摩と一緒に三人で鍋を囲んだ。

美味そうに喰ってたよな、自分でも何時もより美味く感じられた。

笑いながら食べる各務原の顔を思い出すと口元が緩んでいた自分に気付く。

そして志摩とも自然に会話が出来ていた事にも。

部屋に戻り、スマホを手に取るとあの日以来、使われる事の無いグループラインのアカウントを開くが当然誰も打ち込んではいない。

解ってはいる、彼女達に拒絶された俺だがそれを受け入れた俺自身も彼女達を拒絶したという事に、結局は意地の張り合いである。

ただ、お互いにそれを認められないでいるだけなのだ。

『富士山、とーーっても綺麗だった！またキャンプやろーね、じゃーーねーー』

ふと、各務原の笑顔と一緒に彼女の言葉が頭に浮かび、山梨に来て初めてのデイキャンでの志摩との出会いも思い出す。

俺が焚き火台、志摩がテーブル、お互いに二つずつ持ちながら呆然としている時に目が合い、何ともいたたまれない事だった。

「あれが切欠でラインを交換したんだよな」

正直に言おう、楽しい。

そう、楽しいのだ。

キャンプ場に彼女がいた時、後からやって来た時、ほっとするのだ。

もう一度、もう一度だけ信じてみても良いのかもしれない。

「リハビリ、言いえて妙か」

そう言い、スマホを待ち受け画面に戻すと同時にピロンと着信音が鳴る。

誰だ？とラインを開くと…

な《八幡くーーん、なでしこでーーす！（，　▽　、　）ノ》

「…各務原？な、何故に？」

な《えへへ、びっくりした？リンちゃんに教えてもらったんだーー》

な《わたしのアドレスも教えるから八幡君も今度ラインしてね。今日はもう遅いから挨拶だけにするよ、また明日ね、お休みーー（☒ω☒）ｚｚｚ》

「……」

八《おい》

リ《…逃がさん、貴様だけは……》

楽しい…で良いんだよな、良いのかな？

ー◇◆◇ー

別のグループライン～

材《ちょっと、何故我だけ仲間はずれにするのだ。酷くない？ねえ、酷くない？》
川《あんたが入って来るのが遅いだけだろ》
戸《ゴメンね材木座君》
材《だってお風呂に入ってたんだモン》
川《あんたの風呂の時間なんて知らないよ。後、普通にキモイ》
材《うむ、今のは我も反省してる》
戸《あはは、でも良かった。八幡、友達出来たんだ》
材《あやつは素直ではないゆえ、自分で出来たとは言わぬがな》
川《とりあえず、心配事の一つは解決したって事で良いのかな》
戸《だね、後は》
材《あの二人。否、三人か》
川《大志から聞くと、小町ちゃんは学校では普通に過ごしているらしいけど》
戸《由比ヶ浜さん達もだよね。八幡が元気にやっている事、教えてあげたら》
川《やっぱり、どこか無理してる感じがあるみたいだよ》
材《それは止めた方が良い。自分達で現状を知る方法などいくらでもある》
川《だね、それをしない以上私達から言う事じゃ無いよ》
戸《じゃあ、これからも影ながら見守ると言う事で》

材《まったく、世話の焼ける相棒である》

第六話「野クル参加?」

今日も良い天気、絶好のぼちキャン日和だが残念な事に今日も平日である為に学校には行かなければならない。

通学の為に乗り込んだ車両には同じ学校の学生、中にはクラスメイトの顔もちらほらと居た。

話などはした事が無いが、流石に半年以上も通っていれば顔ぐらいは覚えている。

まあ、向うも俺の顔ぐらいしか覚えてないだろうからお互い様である。

「あーー、八幡君だ!」

停車した駅から乗って来た各務原が俺の顔を見た途端そう叫びながら駆け寄って来るのを見て、クラスメイトはぎょっとした顔をする。

それはそうだろう、腐った目をした（ほっとけ）冴えない男に可愛い女の子が笑顔で駆け寄るのだから。

「八幡君もこの電車なんだ」

「ひ、一駅前からな」

各務原はごく自然に俺の横に腰を下ろし、ニコニコと話しかけて来る。
さてと、ひじょーに困った。
彼女は見た目通りの美少女であり、当然俺には怪訝な視線が突き刺さる。
以前の俺ならばそんな彼女の行動に何か裏があるのではと勘ぐっただろうが今は違う。
良くも悪くも天然過ぎるほど天然な彼女はやはり天然なのだ。
うん、何言ってるのか自分でも分からない。
「ねー、八幡君は何時からキャンプしてるの？」
「あ？ああ、三月に千葉から引っ越して来て、それからだな」
「あのね八幡君、やっぱり野クルに入ってくれないかなぁ」
「…それは」
「違うの、一緒にキャンプしようって事じゃなくて、色々教えてほしいの」
「教えて？」
「うん、わたしキャンプの事よく知らないし、あきちゃんやあおいちゃんも本格的なキャンプはした事ないって。だから…」
ここでやっぱり嫌だって言うのは簡単だが…、子犬みたいな目で見られると断りづらい。

「とは言ってもな、俺だってそう詳しい訳じゃないぞ」
「だめ…かなぁ」
ダメ押しとばかりに指を咥えて見上げて来る。
くそう、可愛いじゃないかこのやろう。
「ちょ、ちょっと考えさせてくれるか?」
「うん、いいよ。えへへ～、楽しみだなぁ」
考えさせてくれと言ったのに彼女の中では既にＯＫになっているらしい。
どうしよう、通学中なのにもう帰りたい……。

ー◇◆◇ー
昼休み～
八《助けて…》
戸《何があったの、八幡?》
八《件の彼女と話が通じない》
川《彼女って各務原って名前の?》

八《おう…》
戸《話が通じないってどんな風に？》
八《サークルに入ってキャンプの事などを教えてくれって頼まれて》
八《考えさせてくれと言ったら彼女的にはもう教える事になってるらしい》
八《訂正しようにもあの笑顔を見たら何も言えない》
川《教えてやればいいじゃない》
戸《やっぱりまだ怖い？》
八《くだらない拘りってのは解ってんだがな》
材《解っているのなら迷う事はあるまい》
川《今度は間に合ったようだね》
材《うむ、購買に並んでおったが抜け出して来た》
材《我の…、我のカツサンドが…》
戸《今度、奢ってあげるから》
材《おお、かたじけない》
八　画像
（ファイナルバスターライフル・ＥＷ版》
材　画像

（あんたって人はーー！と叫んでいるシン）
川《あんた達ね…、遊んでるなら帰るよ》
八《ごめんなさい、真面目にやります》
材《面目ない》
戸《兎に角、テントを張ってあげるんじゃなくテントの張り方を教えてあげなよ》
八《戸塚…》
戸《僕の言いたい事、解るよね》
八《ああ、そうだな。解った、張り方を教えてやるよ》
川《それでいいんだよ、頑張りな》
戸《応援してるからね》
八《相談に乗ってくれてサンキュな》
材《はっはっは、気にするでない。我等の仲ではないか》
八　画像
（ログアウトするキリト）
材《あれ、八幡?結局今回も会話してなくない?》
戸《照れてるんだよ、きっと》
川《絶対、違うと思う》

まさか戸塚が〝あのセリフ〟を持ち出して来るとは。
たぶん、俺が捻くれて突っぱねる事も覚悟してたんだろう。
だったら俺も覚悟しなきゃいけないじゃないか。
「さてと、どーしたもんかな」
昼休みも、もう終わり。
俺はカツサンドの袋をゴミ箱に捨てて、教室に戻る。

ー◇◆◇ー

放課後、教室を出た俺は各務原にラインを打つ。

八《朝の話だが、手伝い位ならしてやる》
な《ほんとう!?わーーい、ありがとーーヽ（＊、∀、＊）ノ》

スマホをポケットに戻し、取り合えず部室塔に行くかと思ったら図書室に行く途中な

のか、志摩が通りかかる。
「今から図書室か」
「えっ、ああ、うん…」
「何だよ」
「いや、学校の中でそっちから話しかけて来るとは思わなかったから」
「まあ、色々と考える事があったんでな」
「そっか」
　思えば志摩とはこっちに引っ越して来てからの付き合いだが学校での会話は皆無だった。
　もっとも、話をする機会はいくらでもあったが、俺の方が徹底して話をしようとせずにいた。
　普通ならそんな奴とは関わらなくなるものだが、志摩はそうじゃなかった。
　だから、動くべきなのは俺なのだ。
「なあ、志摩…」
「ん、何だ」
「はちまんくーーーーんっ！」
＝なでしこがあらわれた＝

「さっ、はやく行こ」
「ちょっと待て、各務原」
「何事？」
俺からのラインを見て待ってられなかったのだろう、各務原は俺を見つけるなり走って来て腕を掴んで引っ張って行こうとする。
「はやくはやく、あきちゃん達もきっと喜ぶよ」
「だからちょっと待てって言ってるだろ」
俺を急かす各務原に状況を読み込めない志摩。
「何がどうなってるんだよ、比企谷？」
「いや、少しキャンプのレクチャーしてやろうとしたら、野クルの仲間になった事になってるらしい」
「あ～、そういう事か」

ざわ　　ざわ
ざわ　　ざわ
ざわ　　ざわ

ざわざわ騒がしいので周りを見てみると辺りの生徒達が俺達を見ている。
もしかしてこの状況、〝アレ〟に見られているのか?
「おい、兎に角此処から離れよう」
「え、私もか?」
「リンちゃんも教えてくれるの、わーーい」
二人の腕を掴んでこの場から逃げようとする俺の耳に誰かが呟いた言葉が聞こえる。

「爆発しろ」

嫌、違うから。
全然、全然違うから。

第七話「キャンプめしとキャンプめし」

志摩〜

土曜日、自転車にキャンプ道具を括り付けながら空を見上げれば晴天で絶好のキャンプ日和、今日のご飯はカップ麺ではなくこの前読んだアウトドア料理を試す予定だ。

そういえば野クルの連中はキャンプはするのだろうか？

結局あの後は私もレクチャーに付き合わされたしな。

さてと、そろそろ出発するかと自転車に乗ろうとすると比企谷からラインが届いた。

八《志摩は今日は何処でキャンプするんだ？》

リ《比企谷の方から聞いて来るとは珍しいな》

リ《富士山の目の前の麓キャンプ場ってとこ》

リ《そう言う比企谷は？》

八《ふっふっふっ》

リ《気持ちわりぃ》

八　画像

（ナンバープレートを付けてキャンプ道具を乗せたスーパーカブの写真）
リ《な、なん…だと!?》
八《誕生日迎えて速攻免許を取った》
八《一足先に県外デビュー》
八《ギアを上げて行くぜ》
リ《ぐぬぬ》
リ《ΓΞΦξ》
八《?》
リ《犬のう〇こふんずける呪いをかけた》
八《…ならばその事故現場の写真を送りつけてやる》
リ《やめろ…、本気でやめろ》
八《まあ、冗談はさておき長野に向かってる》
八《ボッチが高ボッチ山高ボッチ高原でボッチにキャンプする》
リ《自虐ネタやめい》

くそう、私も取る予定だったのに先を越されたか。
それにしても今日は別の場所かと、そんな寂しさを感じつつ私は自転車を漕ぎ出し

た。

ー◇◆◇ー

八幡〜

俺は爺ちゃんが譲ってくれたスーパーカブで長野に向かっている。

中古だが、爺ちゃんのメンテナンスが良かった為に運転するのには何の問題も無い。

まあ、流石に今の季節は寒いがな。

寒さに震えながら走っていると対向車線を走っていたカブにはウインドシールドが付けられていた。

「良いな、アレ」

もう少し寒くなったら俺も付けよう。

とか言ってるうちに漸く高ボッチ山に到着、夜明け前から走っているから流石に疲れた。

たしか、もう少し進んだ所に高ボッチ鉱泉があった筈だから其処で冷えた体を温めよう。

……そう思っていた時がありました。

八《おのれ志摩め》
リ《何だいきなり》
八《さっきのお前の呪い、別の形で発動した》
リ《どういう事だ？》
八《おんせん、つぶれていた》
リ《ざまあ（　、・ω・′）ｂ》
八《ΓΞΦξ》
リ《そんなものは効かん》
八《くそう、明日の帰りには絶対温泉に入る！超入る》
リ《おう、入れ入れ》

志摩～
とまあ、ざまあなどと言っては見たが……
「二千円かぁ」

キャンプ場の利用料が結構高く二千円。
それにバーナーやコッヘルなども持って来て、アウトドアごはんを満喫しようとしたが途中にはスーパーは一軒も無くて結局コレ（カレーメン）だもんな。
「はぁ、散歩行くか。初めてのキャンプ場だし二千円も払ったし、色々と元を取らないと損だ」
そして、散歩して周ったが中々いい場所だ。
でかい顔の建物があったり、ライオンっぽい像もあったり、きれいな逆さ富士が撮れる池があったり。
途中で犬どもに昼めしにされそうになったりしたが、まあ文句は無い。
そう思っていると……
「嘘だろ…」
呪いの影響なのか辺り一面にう〇こが落ちている、比企谷め恐ろしい奴。

テントに戻って本を読み、コーヒーを飲んでいると何時の間にか富士山はピンクに染まっていた。
そんな富士山を眺めていると各務原の事がふと頭に浮かんだ。

あいつがこの富士山みたらやっぱりはしゃぐのかな。
ヴー、ヴー
バイブがラインの着信を告げると相手は斉藤だった。

斉《リン、調子はどおーー？》
リ《問題ない。今、まったりとコーヒー飲んでるとこ》
斉《そっかー》
リ《そうだけど》
斉《残念だったな相棒。まったり時間、終了のお知らせだ》
リ《どういう意味だ》
斉《貴様のいるキャンプ場になでしこちゃんを放っておいた》
リ《は？》
斉《まあ、普通にリンがキャンプしてる場所を教えただけだけどねー》
リ《何故に？》
斉《んー、気分が変わるかなって》
リ《まあ、いいけどさ》
斉《晩ご飯にお鍋作るって張り切ってたよ》

リ《お鍋…》
斉《じゃねー、二人で楽しみなよ》
リ《うい》

各務原が来るのか。
まあ、この間は嫌そうな顔して悪かったなと思っていたからその埋め合わせという事でいいか。
「リンちゃーーん」
早速来たかと振り返ると食材や鍋などの道具が入った大きな篭を抱えて走って来る各務原がいた。
「えへへ～～、来ちゃったよ」
「いや、来たのはいいんだけどまさか自転車で来たのか？」
「ううん、お姉ちゃんに車で送ってもらったんだよ」
「ああ、あのお姉さんか。一緒にいるの？」
「今は富士宮の方に遊びに行ってるんだ。9時ごろ戻って来りゅって…、へ、へ、へぷしっ！」

「ひいいっ！」
　くしゃみをした各務原から飛びのいたが幸いあの悲劇は繰り返されなかった。
「お姉ちゃんが来たら車で寝るの、おふとんも持って来たし。あ、でもそれじゃキャンプした事にならないのかなぁ？」
「別にいいんじゃない。車中泊する人も結構いるし」
「あれ、そう言えば八幡君は？」
「別に何時も一緒の場所でキャンプしてる訳じゃないから。今日は長野の方に行ってる」
「そっかー、残念だなぁ。こないだのお返しに食べてもらいたかったのに」
　篭の中の材料を見ながら残念そうに呟く、と言うかこいつはごく普通に名前を呼んでいる。
　くそ、本当は私だって（だったらリンも素直になればいいのにーー）やめろ！脳内でツッコミを入れるな！
「さてとー、まずはお鍋に水を注ぎましてー」
「何か手伝おうか」
「だいじょうぶ、ゆっくりしててー。出来るまで覗いてはダメですよ～」
　なでしこの恩返しかよ。

まあ、手出しするのはかえって邪魔だな。
料理好きなのか、各務原はふんふ～ん♪と鼻歌を歌いながら料理を進め、具材を入れ終わると蓋を閉め、後は煮えるのを待つだけだ。

八幡～
星が瞬き始めた空の下で晩飯を食っていると志摩からラインが届く。

リ《各務原が鍋しょってやって来た》
な《餃子鍋だよー♪》
画像（餃子鍋を食べながらピースサインする二人》

何がどーなったのかは分からんが各務原と一緒にキャンプをしているらしい。

八《おお、中々美味そうだな》
な《餃子鍋おいしいよーー♪》
リ《唐辛子がじんわり効いてポカポカと温まる》

リ《そっちのボッチ飯は美味いか？》
八《……》
八　画像
（焚き火グリルで豚バラとカルビを焼いている）
リ《!!!!》
な《お肉だーーー！》
八《ボッチ山でのボッチ焼肉うめぇ》
画像（箸で持ち上げた肉汁したたるカルビ肉）
リ《な、な、な》
な《＋。：．。おぉ（灬？灬）おぉ。．：。＋。》
八《こんなのもあります》
画像（ハラミ、タン、トントロ、ホルモン）
リ《う、裏切り者！裏切り者！》
な《うらぎりものーー！（怒、凸、怒）》
八《何とでも言うがいい》
八《焼肉丼どーーん》
画像（ご飯の上に焼肉が乗っている）

な《じゅるり―????）。ｏＯ（コレハ…オイシイヤツ…）》
リ《ΓΞΦξ、ΓΞΦξ》
八《そんなものは効かんと言ったのはお前だ、ウワーーッハハハハハハハハ！》

などと言いつつ……
「くそう、餃子鍋美味そうだったな」
と、心底悔しがっている八幡という男がいたそうな。
五月蝿ぇよ！

志摩～
〝なでしこ〟という乱入があったが、まあ満足の行くキャンプだった。
昼過ぎに家に帰り着き、道具などを下ろしているとバイブが着信をつげたのでスマホを覗いて見ると……
「…うげぇ」
八　画像

（モザイク処理された事故現場の写真）

「あのやろう……」

閑話2「スーパーカブのすれ違い」

高ボッチ山でのキャンプを無事に終えた俺は何とか念願のと言うと大げさだが温泉に入る事が出来て漸く落ち着いた。

「ふい～～、暖まった暖まった」

志摩達の方はといえば、姉の車で寝ていた各務原は富士山からの日の出を見終わった後、志摩のテントに潜り込んで二度寝をしてたらしい。

「さてと、出発するか」

エンジンを始動させたカブに跨り、走り始める。

家に帰り着くまでがキャンプだしな。

だが、せっかく温泉で暖まったが長野から山梨に入った辺りで寒さに震え出した。

フェイスカバーの付いたヘルメットに、ハンドルにはハンドルカバーも付いてはいるが打ち付ける風が体感温度を下げる。

何処かで何か暖かい物を補給して少し休まなければと思っていると丁度スーパーが目に入った。

「此処で休憩を取れば家までは持つだろうな」
自動ドアを潜り抜けて中に入ると暖房の暖かさが迎え入れてくれる。

ー◇◆◇ー

??～

椎の店でコーヒーを飲んだ後、私は一人スーパーカブで走っている。
礼子は『海風を浴びに行く』などと訳の分からない事を言って何処かに行ってしまった。
何時もとは違う道を走っているとスーパーが目に入り、そういえばレトルトの残りが少なくなっている事を思い出し、買っておくかと駐車場へと入って行く。
「あれ？これって…」
其処で私が目にしたのは色々な物を括り付けたスーパーカブ。
なんと言うか、旅の途中って感じで…うん、カッコいい。
写真撮りたいな、でも黙って撮っちゃダメかな？
携帯を弄りながら悩んでいると、誰か男の人が近づいて来た。

八幡～

「マッ缶あって助かった。家の近くじゃ売ってる所少ないからな」

まずは暖かいのを一本飲み、そして五本ほど買い足しておいた。

本当はもっと買いたかったが流石にそれ以上は荷物になる。

体の中と外が程好く暖まった所でさあ、帰るかと思っていると俺のカブの所で一人の女の子が何かうろうろしている。

「あのぉ…、何か？」

「え、あの…その…すみません、ちょっとカッコいいなと思って」

「え？」

え、え、え、何？カッコいい？え？え？

「あの…写真、撮っても良いですか？」

写真？そ、そんな…、写真写りなんて自信ないぞ。

「あ、大丈夫です。ナンバープレートは写しませんから」

「え、あ、ど、どうぞ」

「ありがとうございます」

そう言うと彼女は笑いながら携帯でカブの写真を撮っていく。

カブね、うんカブカブ。

ですよねー、そうだと思ったんデスヨ。
ちょっとトランクスさん、タイムマシン貸して。
さっきの俺、殴りに行くから。
うん、安西先生も『まるで成長していない』って呆れ返ってるよ。
彼女は何枚か撮って満足したのか笑顔で振り返る。
「ありがとうございました」
「ど、どういたしまして」
「あの、これって何の道具なんですか？」
「これ？ああ、テントなどのキャンプの道具だよ」
「キャンプ…」
彼女が言うには自分もカブに乗っているが、俺のカブが旅の途中みたいでカッコよかったらしい。
「じゃあ、俺はそろそろ帰るから」
「あ、引き止めてしまってすいません」
「別にいいよ。さよなら」
「さようなら、ありがとうございました」
手を振る彼女に俺も手を振り返し、スーパーカブで走り出す。

「あ〜〜！恥ずかしい恥ずかしい！こんな事誰にも言えねぇよ！」

＝そして数分後、信号待ちで足を付いた時に〝事故〟は起き、加工した〝事故現場〟の写真を志摩に送る八幡であった。＝

第八話「キャンプ会議」

＝放課後、野クルのメンバーは何時もの裏庭に集まっていた＝

「よぉーしお前ら、野クルのメンバーも三人になった事だし改めて冬キャンについて話し合いをするぞ！」

「おす！」

「オス！」

「ぶちょう、いつキャンプするんですか？」

「おう、それを今から話し合うぞ」

「ぶちょう、どこでキャンプするんですか？」

「それも今から決めていくぞ」

「ぶちょう、おやつは…」

「よーし、ちょっと黙ろうか」

「ぶちょう！」

「だからなー」

「あそこに八幡君がいます！」

「何ぃ！よし者共、ひっ捕らえろーーっ！」
「おーーーっ！」
「な、何だ何だ!?」

ー◇◆◇ー

八幡～

まあ何だ、色々と柔らかかったです……

じゃ、なくて！

「一体、何の用だ？」

結局、各務原に捕まってしまった俺はこいつらと一緒に焚き火を囲んでいる。

「私達も本格的にキャンプしよーって話しとってな、ちょっと経験者に色々聞きたいんよ」

「それならこの前も志摩と一緒に教えてやったろ」

「そーなんだけど、あたし達は初心者ってゆーか、キャンプ自体やった事無いからもちっと詳しくお願いします」

大垣が頭を下げてそう言うと他の二人も一緒に頭を下げる。

嫌って言えねーじゃねぇか、一種の脅迫だよコレ。

「はぁ…、まずは持っていく道具をまとめてみろ」
「「おーーーー！」」
「テントと寝袋」
「着替えと歯みがきセット」
　大垣と各務原が提案を出し、犬山がメモにまとめていく。
「ランタンと懐中電灯」
「トイレットペーパーとごみ袋」
「レジャーシートと調理道具」
「マンガとおかし」
「ハンモックとウクレレ」
「わんことフリスビー」
「途中からキャンプ道具や無くて遊び道具になっとるでー」
「まあ、後はそれらの道具が実際にあるかどうかだな」
「えっと、テントはあるし、コンロは」
「うちにあります。リンちゃんとのキャンプで使った実績と信頼があります」
「テントとコンロはＯＫやな」
「ランタンは防災用のがうちにあるぞ」

「これもＯＫやな」
「それから…」
　などと道具類をまとめていく。
　足りない道具などは俺が貸してやっても良いんだが、それではこいつらのキャンプにはならないだろうからあえて黙っておく。
「後はキャンプする場所の情報などを事前に調べておく事だな」
「おお、確かにそれは大切だな」
「聞いた話やけど、いきあたりばったりでキャンプしよーとしたら異世界に行ってもーて魔王と戦う事になってもーた人がいるんやて」
「ええっ！そ、それでその人どうなったの？」
「無事に魔王は倒せたんやけどこっちの世界には帰って来れんやったんやて」
「そんな！うう～かわいそうだよ～」
　各務原は犬山の話を信じきっている様だが、帰って来れないのならその話は誰が伝えたのだろうかという事に気付いてはいない。
「おい、なでしこ。奴の目を見ろ」
「え？」
「……うそやでー」

大垣の言う通り犬山の目を見て見ると、その目は明後日どころか来月あたりを見ていた。
「悪いが俺はバイトがあるからそろそろ帰るぞ」
「そっかー、あんがとな比企谷君」
「残念だけどしかたないね。じゃあ、また明日ね八幡君」
「また今度頼むわ比企谷」
もうごめんだと思うものの、結局は逃げられねーんだろうな。

ー◇◆◇ー

志摩～
放課後、誰もいない図書室で私はスマホで写真を見ている。
この前に麓キャンプ場で撮ったでかい顔の建物や富士山、わんこ共。
なでしこが作った餃子鍋、富士山をバックにピースサインをするなでしこ、桜さんにいたずらされる寝ているなでしこ、二人で撮った自撮り写真。
比企谷が送って来た高ボッチ高原、夜景の写真に焼肉の写真…ゴクリ。
嫌がらせのつもりなのか、肉を焼いている焚き火グリルとの自撮り写真まで送ってき

やがった。
例の〝事故現場〟の写真は速攻削除してやったがな。
「おおー、比企谷君の写真だね」
「ひゃうっ！」
後ろからスマホを覗き見してくる斉藤。
何故こいつは何時も何時も気配を殺して来るんだ。
「待ち受けにするの？」
「するわけないだろ！」
今日みたいに何時、覗き見されるか分かったものじゃない。
何時までも見ていると何を言われるか分からないので画像を戻して行く。
「これがなでしこちゃんが作った鍋？」
「ああ、結構美味かったよ」
「私も食べたかったなー」
「なでしこに頼んだら作ってくれるかもな」
「おお、名前呼び」
「いいだろ別に」
「まー、いいけどねー」

そう言うと斉藤はニヤリと笑う。
何かろくでもない事を言いそうだ。
「比企谷君の事は何時名前で呼ぶの？」
「……予定なんかねーよ」
「またまたぁーー」
「うぜえ」
まあ何だ、そりゃあ何時かは…
じゃ、なくて！

その後、色々と話をして図書室を閉め廊下を歩いているとスマホのバイブが着信を告げる。

な《宅配便でーす》
画像（ベンチの上でダンボールに梱包された大垣）
リ《何してんだよお前ら》
犬《上手に梱包出来たやろ》
八《クーリングオフで》

大《何でだよ！》

第九話「四尾連湖と電話」

志摩〜

明日の天気は晴れで今、私はキャンプの準備中。

そして……

通販で頼んで昨日届いた物を取り出す。

「買っちった♪」

比企谷も使っていた焚き火グリル、これがあれば私にも憧れの焼肉ライフが。

バイクの免許も取ったし、行動範囲が今まで以上に広がる。

まあ、行き成り遠くに行くのは危ないとお母さんに心配されたので明日は四尾連湖に行く事にした。

比企谷はやはり遠くに行くのかな？それとも今回は行かないのかな？

普通に聞けばいいだけなんだろうがやっぱり恥ずかしい。

だって行く場所聞くのは同じ場所に行こうとしてるようで……

「もう寝よ」

この前みたいに聞いて来てくれたらいいのに。

ー◇◆◇ー

なでしこ～

「二人とも、おくれてごめ～ん」

「お～、来た来た」

「甲府駅でまよっちゃって～」

「えーよえーよ、気にせずまったり行こか～」

今日は野クルの皆で始めての本格的なキャンプ。

冬用シェラフも買ったし準備も万端、楽しみだなー。

「では三人揃った所で本日の目的地、イーストウッドキャンプ場へしゅっぱぁーーつ！」

「おーーーっ！」

リンちゃんと八幡君も何処かでキャンプしてるのかな？

やっぱり皆と一緒にキャンプしたいな。

ー◇◆◇ー

八幡～

「おお～～、これは中々」

四尾連湖に着いた俺はその絶景に目を奪われていた。

辺り一面の紅葉が池の水面に映り込み、何とも言えないその光景をスマホで撮っていると後ろからバイクのエンジン音が聞こえて来た。

これだけ景色の良いキャンプ場だからな、誰が来てもおかしくない。

「え…あれ、比企谷？」

「お、おう。志摩も此処だったのか」

やって来たのは志摩だった。

まあ、今までもキャンプ地がかち合うのはしょっちゅうだったしな。

ヘルメットを取ってこっちを見ている志摩の顔は何処と無く赤い気がする。

「何だか顔が赤いぞ。もしかして風邪っぽいのか？」

「ち、ちがわい」

「キャンプに来られた方ですか？」

志摩がそっぽを向いていると管理人らしき人がやって来た。

「はい、予約をした比企谷です」

「わ、私も予約を入れておいた志摩です」

「お二人はご一緒に?」
「ち、違いまスヨ。別々でＳＵ！」
「ですです」
「そうですか、ではあちらで受付をお願いします」
　変な事を聞いて来るので声が裏返ってしまったが、管理人は気にせずに受付をしてくれた。
「お二人共テント泊でよろしいですか?」
「はい」
「そうです」
「サイトは対岸にあって車両は入れませんので湖の周りを歩いて行って下さい。それと入り口にある荷車はご自由に使って下さい」
「分かりました」
「ありがとうございます」
　駐車場に荷車を運びカブから下ろした荷物を載せる。
　志摩のバイクはヤマハ・ビーノだった。
「志摩もバイクの免許取ったんだな」
「比企谷だけ行動範囲が広がるのはズルイ」

「いや、ズルイとか言われてもだな」
「そう言えば……」
荷車を押しながら対岸まで歩いていると志摩は何やら不気味そうな顔をして話し出す。
「何だ？」
「此処って紅葉以外にも牛のオバケでも有名らしいね」
「ああ、たしか丑三つ時になると昔武士に倒された牛鬼の亡霊が出るって奴か」
「怖」
「何でも夜に一人で居ると『ヴモ～』って鳴き声と共にゆら～りと目の前に……」
「ひいいっ！」
「現れる事があるとかないとか」
「お、お前な」
「志摩が言い出した事だろうが。ま、ただの都市伝説だろ」
「だ、だよな…」
おそらくは俺をびびらせようとしたのだろうがより明確に説明し返したら逆に自分がびびったらしい。
そうして志摩は何が書いてあるのかは読めない石碑に小銭を投げて祈った後、ふらふ

らと歩いて行く。
「お～い、何処に行く？」
森の中へ。

ー◇◆◇ー

新城肇～

『そうか、お前さんは相変わらずキャンプ漬けの日々か』
「ああ、お前はもう出来んのか？」
『うむ、デイキャンぐらいならとは思うんだが息子が許してくれんのでな』
「それは残念だな。ワシが付き合ってやれればいいんだが」
『これ以上息子達を心配させる訳にもいかんからな。後は孫に任せるとするよ』
「孫か、ワシも以前使っていた道具を孫に譲ったしな」
『たしかリンちゃんだったか』
「バイクの免許も取ったし、今日も何処かに行っとるらしい」
『アイツもワシのお気に入りじゃったカブであちこちに行ってよく写真を送って来てくれるよ』
「じゃあワシも送ってやろう。それを見て精々くやしがっておれ奏八」

『おのれ、犬のう〇こでもふんずけていろ』
「ぬかせ」

第十話「四尾蓮湖キャンプと牛鬼オバケ」

「牛鬼、おばけ、都市伝説、都市伝説…としでんてつ…」
「それじゃ亡霊じゃなくキングなボンビーが出て来るぞ」
少しばかり驚かせすぎたのか、志摩は青い顔をしてぶつぶつ呟いている。
「丑三つ時になる前に寝れば良いだけだろ」
「…それもそっか」
諦めたのか割り切ったのか志摩は平常運転に戻りトコトコと歩いて行く、ちょろい女だぜ。
対岸に辿り着くとこんなに良い景色と場所なのに俺達の他にはテントが一つだけとほぼ貸しきり状態である。
「さてと、何処にするかだが」
「向うに直火ＯＫの場所があるよ」
「じゃ、其処にするか」
「うい」
そして場所を決めると何時ものごとく程々に距離を開けて其々にテント設営にかか

る。

志摩のテントは吊り下げ式で俺のはスリーブ式である。

「よし、新記録」

キャンプを始めた頃はけっこう手間取ってはいたが、流石に半年以上もやっていれば手馴れて来る。

同じ様にテントを張り終えた志摩が携帯バーナーで沸かしたお湯でココアを作ると俺にも勧めて来た。

「比企谷も飲む？」

「おう、サンキュ」

「前から聞こうと思っていたけど比企谷はこっちに引っ越して来る前もキャンプしてたの？」

「いや、こっちに引っ越して来た時にカブと一緒にキャンプ道具一式爺ちゃんに貰ったんだ」

「そうなんだ。私もキャンプ始めたのは中一の時にお爺ちゃんにテントを貰ったのが切欠なんだ」

「案外爺ちゃん同士キャンプ仲間だったりしてな」

「だったら面白いね」

＝ビンゴである＝

「さてと、俺はちょっと散歩して来るわ」

「じゃあ、私は火を熾してまったりしてる」

そう言いながら志摩は焚き火グリルを組み立て始めた。

「お、志摩の晩飯はひょっとして焼肉か？」

「ふふふ、比企谷だけに抜け駆けはさせない」

「で、何の肉を買って来たんだ？」

「……途中、ゼブラに寄ったけど豚肉とカルビしか無かった」

「まあ、焼肉やるには季節外れだしな。俺の時はちゃんとした肉屋で買ったし」

「そ、そんな裏技があったなんて……」

いや、裏技ってそれほど大したものじゃないだろう。

「まあ、俺の晩飯は鳥鍋作るから分けてやるよ」

そう言うとｏｒｚとうな垂れていた志摩はがばっと顔を上げて目を輝かせていた。

この食いしん坊さんめ。

ー◇◆◇ー

カシャリ

山並みや湖面に映る紅葉などを撮りながら歩いて行く。
我ながら中々出来の良い写真だ、後で戸塚達にも送ってやろう。
「こんにちは、ひょっとして向うのテントの方？」
「え？ひゃ、はい、そうでしゅ」
うわ～、また噛んでしまった。
俺達のより本格的なテントだし、調理道具なんかも充実している。
かなりのベテランキャンパーの様だ。
これから料理をするのだろう、テーブルには材料や調味料が乗せられており、その他には料理酒……と思ったら酒その物だった。
「グビグビ、うい～～」
テーブルの向こう側にはこの時間に既に出来上がっている女性がビールを飲んでいた。
「じゃ、じゃあお邪魔しました」
「はい、どうも」
軽く会釈してその場を後にする。
カップルかな？カップルだろうな～～。
リア充砕け散れ。

はい、まったく成長していません。

ー◇◆◇ー
なでしこ～
ヴー、ヴー、
「う、うぅ～ん」
あれ、そうかあたし温泉入ってのんびりしてたら寝ちゃってたんだ。
あ、八幡君からラインだ。

八《四尾連湖なう》
画像（湖畔に写る紅葉と夕焼け）
な《うわー、綺麗だね》
八《だろ、来て良かったよ》
な《あたしも今度行きたいなー》
八《ま、機会はあるさ》

な《八幡君は一人なの？》
八《一人で来たんだが、偶然志摩も同じ場所だった》
……八幡君とリンちゃん、二人一緒なんだ。
な《へー、そうなんだ》
八《今から晩飯の準備だ、撮った写真は月曜日にやるよ》
な《うん、楽しみにしてるね。じゃーねー》
八《おう》

そっか、八幡君とリンちゃん、二人でキャンプしてるんだ。
チクンッ
「あ、あれ？今の…何？」
何か胸が痛かった。
八幡君……、あれ？
「四尾連湖の写真…、こうよう……、ゆうやけ……」

え～～と、ゆうやけってことはゆうがたで、ゆうがたはよるのまえで……
「あ、あきちゃん！あおいちゃん！もう４時過ぎてるよーーーっ！」
「あふぇ～～」
「うぎゃぁーーーーっ！思いっきり寝過ごしたぁーーーーっ！」
「あかんって～、それは私のおまんじゅうや～～」
「寝ぼけてんじゃねえーーーーっ！」

ー◇◆◇ー

八幡～

散歩を終えてテントに戻ってみると志摩が焚き火グリルの前でうな垂れていた。
「何があった？」
「…比企谷、火が……火が点かない」
どうやらありったけの着火材を使っても炭に火が移らず火が熾せないらしい。
「まあ、さっきも言ったけど俺の鍋食わせてやるから今日の所は焼肉は諦めて…」
「やだ、やきにくがいい」
まいった、すっかり拗ねてやがる。

俺は着火材なんか持って来てないし、かといって他の物で代用出来るほどベテランでもないし…、ベテラン？

ー◇◆◇ー

志摩～

ふう、何時まで眺めていても火が点くわけでもないしいい加減諦めるか。

「おーい、志摩」

比企谷の声が聞こえたので振り向いてみると誰かを連れて来ていた。

「ベテランさんを連れて来た」

「火が点かないんだって？」

ベテランさんはグリルの中の炭の具合などを調べる。

「これは備長炭だね。火力も強いし長持ちもするけど火が点き難いんだ」

そう言ってベテランさんは成型炭を持って来てくれてグリルの中に入れて火を点ける。

「後は程好く火が熾った所で崩して、その上に備長炭を乗せればじきに点くよ」

「有難うございます」

一時はどうなるかと思ったけどこれでようやく焼肉が食える。
「二人は一緒にキャンプしてるの？」
「い、いや～～、違いまスヨ。同じ学校で偶然同じ場所になったダけデすヨ、はイ」
…たしかにそうだけど、其処まで必死になって否定しなくてもいいじゃないか。
「あはは、じゃあがんばってね」
ベテランさんは手を振りながら戻って行き、私達も食事の準備をする。

ー◇◆◇ー

八幡～
「よし、丁度いい頃合だ」
鍋の蓋を開けると野菜や鶏肉がぐつぐつと煮えており、我ながらだが食欲をそそる出来栄えだ。
「こっちも焼けたよ」
志摩の方も焼き鳥や豚バラなどがジュージューと油が跳ねていて美味そうだ。
「ねえ比企谷、さっきのお礼に少しおすそ分けしない」
「そうだな、じゃあ持って行くか」

そしてそれぞれの料理を使い捨てのお椀と皿に乗せてベテランさんのテントへと持って行く。
「すみません」
「あれ、さっきの人達」
「先ほどはお世話になりました。お返しといっては何ですがどうぞ」
「うわ～、美味しそうだね。別に気にしなくても良かったのに」
ベテランさんは俺達の料理を受け取ると、自分達の鍋の中から何やら掬い出している。
その傍らで彼女さんは未だに飲み続けている。
「じゃあ、これはお返し。ちょっと作りすぎちゃって」
そう言って差し出して来たのはジャンバラヤである、これも美味そうだ。
「ひょっと、あんたらひ～～、あひゃひのひゃけを～～」
「はいはい、酔っ払いは気にしないでね」
苦労しそうだな、彼氏さん。
「ありがとうございました」
「ご馳走になります」
「こっちこそありがとう、気をつけてね」

お返しのお返しを受け取って俺達は自分達のテントに戻る。
ジャンバラヤ、鍋、焼き鳥、鍋、焼肉、ジャンバラヤ…と、ローテーションで食べて行く。

ー◇◆◇ー

志摩～
「食ったな～～」
「食べ過ぎた」
さすがに量は多かったけど残すのはもったいないので完食した。
焼肉に使った炭を種火にして焚き火を熾し、すっかりと暗くなった湖面を見つめる。
「ねえ比企谷」
「ん、何だ？」
「比企谷はこっちに来てからキャンプを始めたって言ってたよね」
「ああ、まあ子供の頃は爺ちゃん達とキャンプはよくしたけど」
「そうなんだ」
お爺ちゃんとって事は山梨でしてたって事なんだよな。
じゃあ、子供の頃に比企谷に会った事とかあるのかな？

「ふあ～～、俺そろそろテントに戻るわ」
「あ、うん、お休み」
「おう、お休み～」
　比企谷はテントに戻り、私はココアを飲みながら考える。
「また聞けなかったな」
　何故一人で山梨に来たのか、何故一人暮らしなのか。
　色々と話す様になって、以前よりずっと仲良くなったとは思うけどやっぱり怖くて聞けない。
「何時か聞ける様になるのかな?……なれたらいいな」
　月を見上げながらそう思う。

＝丑三つ時＝

「うう～ん、水分取りすぎた。トイレ」
　用を足してテントに戻る際に湖面を見ると星空が映っていた。
「綺麗だな、やっぱり私湖畔でのキャンプが好きだな」

そんな風に湖面を見つめていると…

『ヴモ～』

「……うそ…だよね」

そうであってくれと横を向くと其処には黒い影に大きな角が。

『ヴモォォ～～～』

「ひぇあぁぁーーーーー！」

嘘嘘嘘嘘うそうそうそうそぉーーーーーー、ホントに出たぁーーーーーっ！

「う、もあ～、あ～、頭痛い～」

「ちょっとお姉ちゃん、夜中に徘徊するの止めてよ。もー、頭に枝なんか付けて」

ー◇◆◇ー

「う、うぅ～ん」

夕べは酷い目にあった、まさか本当に出るとは。

後は……、比企谷にばれる前に早く自分のテントに戻らなくちゃ。

「そ～と、起こさない様に」
幸い、比企谷は向こう側を向いているので大丈夫だろう。
「お休み」
よく寝ている比企谷に挨拶をして〝比企谷〟のテントを出て行く。

ー◇◆◇ー
八幡～
「お休み」
ザッザッザッと足音が離れて行く。
「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」
お休みじゃねえよーーーーーーっ！
何だよアイツ、何なのアイツ、何してくれちゃってんだよアイツ！
何で俺のテントで寝てんだよ、ふと目が覚めたら目の前に志摩の寝顔があるって、心臓止まるかと思ったわ！死ぬかと思ったわ！
叫び声上げなかった俺を褒めたい、よくやったぞ八幡！頑張ったぞ八幡！
そしてスマホを見ると……

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!」
何してんだよ俺、何してくれちゃったんだよ俺、何で志摩の寝顔撮っちゃってんの？
目を覚まさなかったから良かったけど、ばれたら通報ものだぞ！
でも……
「可愛いな」
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!」
可愛いじゃねぇだろうがぁーーーーーーっ！
あーーーーー、もう！あーーーーーー、もう！

ー◇◆◇ー

志摩〜
テントに戻り、寝袋を片付けようとすると……
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!」
何がお休みだよ、お休みじゃないだろうがぁーーーーーーっ！
何だよ私、何なの私、何してしまったんだよ私！
いくら怖かったからって何で比企谷のテントで寝ちゃったんだよ私！

心臓ドキドキして、ホントよく眠れたよ私。
そうしてスマホを見ると…
「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」
何してるの私、何しちゃったの私、何比企谷の寝顔撮っちゃったの？
目を覚まさなかったから良かったけど、ばれたらどうなっていたか。
でも…
「意外と寝顔可愛いんだ」
「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」
可愛いじゃないだろぅーーーーーーーっ！
あーーーーーー、もう！あーーーーーー、もう！

第十一話「斉藤恵那は告らせたい」

斉藤〜

さて、困った。

何が困ったかと言うと目の前の親友である志摩リンの事だ。

「う〜〜〜〜」

図書室のカウンターにうつ伏せで倒れこみ、ずっと唸っている。

多分、土日の四尾蓮湖でのキャンプが原因なのだろうが今日一日、この状態である。

どうしたものかと思っているとリンはスマホを操作して写真をスライドしていく。

そして数枚目の写真を見た私の口から「ぶほふぁっ！」と変な声が出た。

（な、何これ？何で比企谷君の寝顔が？）

ただ単に比企谷君が写っているだけなら何時もの様にからかってる所だけど流石にコレはからかえる範囲を超えている。

うすうす気付いてはいたけどやはりこれで確定だ。

（やっぱりリンってば比企谷君の事好きなんだよね）

私が居る事には気付いていないらしくスマホの画面を眺めながらニヨニヨしている
今の内にリンのお団子を一旦解き、ちょっとしたアクセントを加えて改めて纏める。
（ここまでやって気付かないって逆に凄いよね）
さてと
「あ、比企谷君だ」
「うひゃおういっ！」
髪型いじくっても反応しなかったのに比企谷君の名前出したら反応するって……
「さ、斉藤？」
「やっほー」
慌ててお手玉してたスマホの画面を待ち受けに戻すがもう遅い、寝顔の画像はすでに確認済みだ。
「あれれーおかしいぞー。なにをそんなにあわてているのかなー」
「にゃ、何でもないじょ」
顔を真っ赤にしながらスマホを隠す様に抱きしめる。
くそう、可愛いな。
カシャリ
思わずその姿を撮影する。

「ちょ、ちょっと待て。何故写真に撮る？」
「いや、何となく」
「何となくって、いいから消せ」
「だが、断る！」
　リンは私のスマホを奪おうとするがそうはさせじと右へ左へと移動させる。
「あんまり暴れると比企谷君のスマホに誤送信しちゃうよ」
「うっ、うう～～」
「じゃあそろそろ帰るね」
　これ以上しつこくすると本当に送信されると思ったのか、「う～～」と唸りながらも大人しくなる。
「大丈夫、大丈夫、本当に送ったりしないから」
「信じられるか！」
「そんな事したら、からかうネタが減るからそこは信用してくれていいよ」
「なおさら悪いわ！」
　マフラーを括り、鞄を掴んで扉に手をかけて振り向きざまにリンに話しかける。
「でも、冗談抜きで告白した方が良いよ」
「だ、だから比企谷とはそんなんじゃ…」

「はいはい」
「人の話を聞けーーーっ！」
図書室を後にして歩きながらも思う。
（初々しい二人を見てるのも楽しいけどやっぱり告らせたい）
まあ、現実問題として比企谷君の方が問題なんだけどね。

ー◇◆◇ー

廊下を歩いていると、あまり人は通らない裏口に比企谷君がいた。
丁度良い、リンとの事を煽ってみようとそ～と近づくとスマホを眺めている様でその画面を後ろから覗きこむと「ぶほふぁっ！」と変な声が出た。
（な、何でこの人リンの寝顔撮ってるのっ!?）
ひょっとしてリンのテントに忍び込んだのかと思ったが、よくよく見るとテントの色がリンのとは違う。
つまり……
（リンが比企谷君のテントに忍び込んで寝顔を撮ってそのまま寝て、その後に目を覚ました比企谷君がリンの寝顔を撮ったっていう事か）

何やってんのよ、この二人。
というより何でリンは比企谷君のテントで寝てるの？
比企谷君は私が後ろにいる事に気付いていないらしく写真をスライドさせていく。
山並みや湖畔に紅葉の写真に夕食であろう、鍋と焼肉の写真。
そしてリンと二人で撮った自撮りの写真、そして最初の寝顔の写真に戻る。
もう確定だろう、比企谷君もリンに惹かれているのは間違いない。
実際、「う～～～～～」と唸りながら写真を見ている彼の耳は真っ赤だ。
さてと
「あ、比企谷君だ」
「うひゃおういっ！」
覗き込んでいた事がばれない様に、曲がり角まで戻って名前を呼ぶ。
「さ、斉藤？」
「やっほー」
慌ててお手玉してたスマホの画面を待ち受けに戻すがもう遅い、寝顔の画像はすでに確認済みだ。
「あれれーおかしいぞー。なにをそんなにあわてているのかなー」
「にゃ、何でもないじょ」

顔を真っ赤にしながらスマホを隠す様に抱きしめる。
くそう、こっちも可愛いな。
カシャリ
思わずその姿を撮影する。
「ちょ、ちょっと待て。何故写真に撮る？」
「いや、何となく」
「何となくって、いいから消せ」
「だが、断る！」
比企谷君は私のスマホを奪おうとするがそうはさせじと右へ左へと移動させる。
「あんまり暴れるとリンのスマホに誤送信しちゃうよ」
「うっ、うう～～」
「あはは」
軽く笑うが此処までのくだり、リンと全く一緒だよ。
本当にこの二人、相性が良いな。
「大丈夫、大丈夫、本当に送ったりしないから」
「信じられるか！」
「そんな事したら、からかうネタが減るからそこは信用してくれていいよ」

「なおさら悪いわ！」
「でも、冗談抜きで告白した方が良いよ」
「だ、だから志摩とはそんなんじゃ…」
「はいはい、じゃあ私帰るね」
「人の話を聞けーーーっ！」
…ほんとーに相性良いなこいつら、さっさと告ってほしい。

ー◇◆◇ー

志摩～
くそう、斉藤め変な事言いやがって。
告白だって……、それが出来れば苦労なんかしないのに。
そんな事を思いながら廊下を歩いているとすれ違う皆は不思議そうな顔をしながらこっちを見てくる。
「何なんだ？」
下駄箱に行くと丁度比企谷も帰るところらしく靴を履き替えていたのでさっと壁に隠れる。

今日はずっとこの調子で比企谷からは逃げてばかりだ。
ちゃんと向き合って話がしたいけど、どうしても二の足を踏んでしまう。
比企谷がいなくなるのを待ってから靴を履き替えて私も家へと帰る。
ラインでなら話が出来るかな？
スマホを取り出してとりあえず挨拶を打ち込む。

リ《…よう》
八《お、おう》

さて、これからどう話を？げていけば良いのかだが…向うも何だかぎこちないのは気のせいかな？

リ《どんな感じ？》
八《まあ、そんな感じだ》

そんな感じってどんな感じだよ。
ああ、自分でも何言ってるのか分からない。

リ《なんと言うか…うん、四尾蓮湖楽しかったね》
八《まあな。次は夏辺りに行ってみたいまである》
リ《そうだね。私は期間限定で冬だけキャンプしてるんだけど、ああいう所なら夏に行っても良いかも》
八《冬だけ？なんか勿体無いな》
リ《何だか冬キャンプが好きなんだ》
八《まあ、人の好き好きに文句言わないけどさ》
リ《今度は春からも続けるかどうかは考えてみるよ》
八《それが良い。お前とのキャンプも結構楽しいしな》
リ《ありがと》

…ラインとはいえ、けっこう普通に話せるな。
ちょっと気にしすぎたのかもしれない。
私が比企谷のテントに忍び込んでたのもばれていない筈だし。

八《へるぷみー》

リ《何があった？》
八《各務原に見つかった》
リ《がんばれ》
八《一人だけ逃げる気か》
リ《（・ω・）ノシ　》

ラインの画面を閉じると何処からか『ぶちょう、八幡君を捕まえました』『よーし、でかしたぞなでしこ部員』『おす！』とか聞こえて来た。
そうだよな、気にしすぎなければ良いんだ。
そう思えば気分もすっきりして家に帰る足も軽くなった気がした。
明日からは比企谷とも普通に話せるだろう。

ー◇◆◇ー

八幡～
くそ、各務原め。
結局あの後、野クルのメンバーにレクチャーみたいな事をさせられた。

野クルに入部したつもりは無いのにな。
それにしても、ラインとは言え志摩とは普通に会話出来たな。
ちょっと気にしすぎたのかもしれない。
俺が寝た振りしてたのもばれていない様だし。
そうだよな、気にしすぎなければ良いんだ。
そう思えば気分もすっきりして家に帰る足も軽くなった気がした。
明日からは志摩とも普通に話せるだろう。

ー◇◆◇ー

志摩〜
皆が変な顔してたのはこの所為か！
家に帰り、顔を洗おうと洗面所の鏡を見てみればそこには比企谷みたいなアホ毛がちょこんと生えていた。
「さ、斉藤め！」
こんな事をするのはあいつしかいない。
何してくれてるんだよ、何度櫛を入れてもぴょこんと元に戻る、何かの呪いか？

でも、おそろいと思えば……
じゃ、ないよ！せっかく気分落ち着いて来たのに！

まあ、お風呂入ったら元に戻ったけど。
「もったいなかったかな」
じゃ、ないよ！

＝翌日＝
斉藤〜
さてと、どうやらあの二人はお互いに寝顔撮り合ってる事には気付いてないみたいだし、今日もあの調子なんだろうな。
仕方ない、私が一肌脱ぎますか！
「あれ？」

「おす、志摩」
「うい、比企谷」
「今日も良い天気だな」

「休みだったら丁度良いキャンプ日和だったのにね」
「それな」

何普通に会話してるの？
と言うよりもう見た目ただのカップルじゃない。
さっさと付き合ってよ！

第十二話「そして比企谷八幡と比企谷小町は」

コンコン…
ドアをノックしても返事は返ってこない。
コンコン…コンコン…
無駄だと分かっていても彼女はノックをする、それが何かの儀式であるかの様に。
そっとドアを開いてもそこには誰もいない。
「……お兄ちゃん…」
灯りの無い暗い部屋、シーツや布団がかけられていないベッド。
そんな部屋の中で彼女は膝を抱えて涙ぐむ。
「お兄ちゃん…おにいちゃぁん……ごめんなさぁい、帰って来てよぉ…。小町、寂しいよぉ」
失ってしまった兄との絆。
もう一度取り戻したいと彼女は一人涙する。

ー◇◆◇ー

八幡〜

「小町が学校に行ってない？」

二時限目が終わった後の休み時間にお袋から電話が来た。

学校から「娘さんが来てないんですが病欠ですか？」と連絡があったそうだ。

『たぶんだけどあの娘、あんたの所に行ったんだと思うの』

「根拠は？」

『小町、昨夜はあんたの部屋で寝てたのよ。起こしに行った時、自分の部屋にいなかったからもしかしてとあんたの部屋を覗いてみたら毛布に包まっていたわ。泣いていたんでしょうね、頬に涙の後もあったし』

「小町に電話は？」

『したわ、でもすぐに切れてその後は電源を切ったらしくつながらないの』

「俺が今住んでる爺ちゃんの家の場所は知ってるんだよな」

『ええ』

俺は少し考えて返事をする。

「分かった。今日はなるべく早く帰るよ」

『お願いね八幡、それと…』
「ああ、責めたり追い返したりはしないよ。俺もいい加減向き合わないといけないと思ってたからな」
『成長したわね八幡。志摩…、リンちゃんのおかげかしら？』
「ち、ちがうし！しまはぜんぜんかんけいないし！」
『じゃあ、なでしこちゃん？』
「あーもう！授業始まるから切るぞ」
『ふふふ』
　くそっ！
　あいつらの事なんか教えるんじゃなかった。
　それにしても…
「何してんだよ小町」
　本当に俺に会いに来るのか？
　何で今更……

―◇◆◇―

八《相談がある》

昼休みにグループラインを開いてそう打ち込む。

戸《どうしたの八幡》
八《どうやら小町がこっちに来るらしい》
川《来るらしいってどういう事？》
八《今日、学校を無断欠席したとお袋から連絡があった》
戸《八幡に会いに行く為にだね》
川《そう言えば大志もこの頃小町ちゃんの様子が変だって言ってたよ》
材《それで八幡はどうするつもりなのだ？》
八《どうするもなにも、普通に話をするが》
戸《うん、やっぱりそれが良いよ》
材《うおおお～～～～ん！》
川《な、何だよ》
材《か、会話が。初めてまともな会話のキャッチボールが》
八　画像

（メラゾーマではないメラを放つ大魔王バーン）
川《余計な茶々入れるなら黙っておきな》
戸《そうだよ材木座君、真面目な話をしてるんだからね》
材《はい…》
戸《それで八幡、大丈夫なの？》
八《ちゃんと向き合うよ、もうお互いにそう言う時期なんだと思う》
川《ああ、それが良いよ》
戸《成長したね八幡。これも志摩ちゃんのおかげかな》
八《違うって》
川《じゃあ、なでしこって娘？》
八《お前達までお袋みたいな事言うなよ》
戸《自覚無いんだ》
材《ｒａｊｕｂｋｈｔｓｙ》
戸《？》
川《何言ってんのあんた》
八《東大王か…》
戸《ああ、なるほど》

川《え～と、解読すると…》
戸《材木座君…》
材《だって、だって》
八《まあ、小町とは仲直りしたいからな。本当はずっと後悔してたんだ》
戸《八幡…》
川《やっと本音を言ったね》
戸《がんばってね》
川《応援してるよ》
八《サンキュー》
材《ねえ、せめて罵倒して。無視される方が辛い》
材《……》
材《読んでる？見てる？既読、つかないんだけど》
材《……》
材《我は貝になりたい》

ー◇◆◇ー

全ての授業が終わり、家に帰ろうとすると何時もの様に各務原が野クルに誘って来た

が「今日は大事な用事がある」と言うと急いでいる事を察してくれたのか「そっか」とあっさりと開放してくれた。

志摩にも《今日は大事な用事があるから帰る》とラインを送ると《急ぎすぎて事故に合うなよ》と返信して来た。

「あれ、わざわざ志摩に言う必要あったか？」

まあ、それはそれとして早く帰らなくては。

小町が来ていればいいが、もし来なければ本格的に行方不明だ。

家に帰ってみれば玄関の脇に膝を抱えて座り込み、顔を膝に埋めている小町がいた。

近づくと俺の足音に気付いたのか肩をビクっとさせる小町の頭に手を乗せるとようやく顔を上げた。

「何やってるんだよ小町」

「…お、おにいぢゃ……ん゛。ぐすっ」

「とにかく上がれ」

手を掴んで立ち上がらせ、玄関を開けて中に招き入れる。

居間に座らせてる間にコップに水を汲む。

冷蔵庫にはマッ缶の備蓄があるのでインスタントコーヒーなんて洒落たものは無い。
ちゃぶ台にコップを乗せマッ缶を飲むと小町は俺を見ながら
「私もまっくすこーひーがいい」
と言った。
「でもお前、こいつは甘すぎると敬遠してたじゃないか」
「まっくすこーひーがいい…ぐすっ」
「ちょっと待ってろ」
鼻を啜りながらそう言うので取りに行き、戻って来ると俺の飲みかけのマッ缶を飲んでいた。
間接なんとかだぞと言おうとしたが、逆にややこしくなりそうな気がしたので黙っておく事にした。
しばらくして、ようやくすすり泣きが止まった所で話しかける。
「それで小町、何で此処に来たんだ？お袋も心配してたぞ」
「…もって、お兄ちゃんも心配してくれたの？」
「当たり前だろうが」
頭をかきながらぶっきらぼうにそう言うと小町の瞳からはまた涙が零れだした。
「ふえええ～～～～ん」

「ど、どうした？」
「だって、だっでぇ～～～。小町、お兄ぢゃんにぎらわれだままだと思っで～～～。ふえぇ～～～ん！」
「小町…」
　ちゃぶ台に突っ伏して泣き出した小町の頭に手を乗せて撫でると涙と鼻水でぐちゃぐやになった顔を上げたのでティッシュを差し出すとちーんと鼻をかむ。
「ご、ごめんね〝、ごめんなざ～～い」
「ごめんって何がだ？」
　しまった、今のは流石に意地が悪かった。
「こ、小町、よく事情知らない〝のに…、お、お兄ちゃんが悪いっでぎめつけて…、お兄ちゃんの事、責めぢゃった」
「…もう良いよ」
「良くないよ！こ、こま…小町が自分を許せ〝ないもん〝！ずっと、謝りだがったのに、全然謝れなぐて」
「小町」
「お兄ちゃんいなぐて、ざみしぐって…ぐすっ、ごめんなさい、ごめんなさい～～！…ふぇ？」

泣き続ける小町を俺は思わず抱きしめていた。
「おにい…ちゃん？」
「だからもう良いって。意地張ってたのは俺も同じだ」
「ぐすっ」
「ごめんな、小町」
「おにいちゃん、お兄ちゃん。ありがとう、ごめんなさい！うわあぁ～～～～ん！」
正直まだ蟠りはあった。
だけど小町はちゃんと自分の足でここに来た、ちゃんと自分の言葉で謝って来た。
だったら俺も意地を張り続ける必要は無い、俺達はまた兄妹に戻れる。
「あ～～、腹減った。小町、久しぶりに小町の飯が食いたい」
「うん、うん。小町、思いっきり腕をふるうよ」

ー◇◆◇ー

台所からは「ふん、ふ～～ん」と料理をしている小町の鼻歌が聞こえて来て、俺はその間にお袋に連絡しておこうと電話をかける。
「お袋」

『八幡、小町は？』
「ああ、やっぱりこっちに来ていたよ」
『それで？』
「色々と話し合ってな、取り合えず仲直りしたよ」
『そう、良かった。小町はどうしてるの』
「飯を作ってくれてる。久しぶりだから楽しみだよ」
『うふふ。じゃあ、今日はそっちに泊まらせてあげて』
「分かった。所で親父は？」
『さあ？さっき帰って来た時に小町が学校に行っていない事を言ったら慌てて探しに出かけたわ。何処を探しているのやら』
「切りの良い所で教えてやれよ」
『今言うとそっちに向かってややこしくなるでしょう。明日の夕方にでも迎えに行かせるわ』
「了解した。じゃあな」
『ええ、小町をよろしくね』
　電話を終えて部屋着に着替えると丁度料理が出来たらしくちゃぶ台の上には美味そうな料理が並んでいた。

「おお、美味そうだな」
「えへへ、小町頑張ったよ」
その後、小町の飯を堪能してお互いに色々と話をした。
「ふ～ん、お兄ちゃんキャンプをしてたんだ」
「爺ちゃんのキャンプ道具を譲ってもらったからな」
「小町が寂しがってる時、他の女の人と楽しくキャンプしてたんだ」
「小町ちゃん、何が言いたいのかな？」
「何でもないよーだ、つーーん！」
小町は拗ねてつーんなどと言いながら顔を反らすがかえって安心した。
まだ少しぎこちないが俺達の仲は元通りに戻っていっている。

「さて、今日は此処で寝ろ」
客間に布団を敷こうとしていると小町は枕だけを持って客間から出て行く。
「おい、小町」
小町の後を追うと俺の部屋へと入り、ベッドの上に枕を置く。
「小町もここで寝る」

「いや、それは…」
「ここで寝る」
「だからあのな」
「ここでねるの」
「…分かったよ」
ぷくーと頬を膨らませて動こうとしないので俺が折れた。
えへへと笑いながらベッドに入り、自分の横をポンポンと叩く。

す～、す～と俺に抱きついて寝息を立てる小町を見ながらまだお互いに子供だった頃の事を思い出し、小町との絆を取り戻せた事に安心して俺も眠りに付く。

第十三話「初顔合わせと比企谷家（仮）」

翌朝、親父はさっそくこっちに小町を迎えに来ようとしたが、お袋に叱られてしぶしぶながらも会社に行ったらしい。

俺も俺で学校を休む訳にもいかないので取り合えず俺は学校に行き、小町はその間留守番をしておくという事になった。

「辺りを散歩するくらいなら良いがあまり遠出はするなよ。土地勘、無いんだから」

「分かってるよ、小町は子供じゃないんだから。それと、はいお弁当！えへへ、まるで愛妻弁当だね。あ、今の小町的にポイント高い」

「調子に乗るな」

「あたっ」

弁当を渡してくる小町の頭に軽くチョップをする。

「じゃあ、行って来るわ」

「行ってらっしゃーい」

弁当を鞄に入れて学校に行く俺を小町は手を振って見送る。

正直な所、まだ違和感は拭えないがそれでも前へと進むと決めた事だ。

ー◇◆◇ー

「八幡君！」

電車に乗り込んで来た各務原は俺を見つけると笑顔で名前を呼びながら俺の横に座って来て、相変わらず周りの視線が痛い。

違うのに……

「大事な用事って無事に終わったの？」

「あ、ああ、何とかな」

「どんな用事だったのか聞いてもいい？」

小首を傾げながら聞いて来る各務原。

その表情から面白半分ではないようだし、あえて隠す必要は無いな。

「妹が来たんだよ」

「妹？」

「ああ、ちょっと喧嘩しててな。まあ、色々あって仲直りしたというか」

「へ～～」

俺の顔を覗き込むその顔は『紹介して、紹介して』と言っているがそれはどうなのだろう？

小町は今日にも帰る事だし別に紹介しなくても良いんじゃないかなと思っていると各務原はピポピポとスマホに何やら書き込んでいる。

「…おい、何してる？」

「え？リンちゃん達に教えてあげようかな～って」

「な、何故に？」

ピロンッ

スマホにラインの通知が入った。

どうしよう、無視したいけどしたらしたで絶対にややこしくなるよな。

まあ、とりあえず読んで既読を点ければ文句は言わないだろう。

斉《妹ちゃん来てるんだ。会いたいな～～》

大《何だよ、水臭いな比企谷。会いたいぜ》

犬《私にも妹おるから分かるで。妹、可愛ええよな。会いたいわ～》

リ《私は別に良いけどさ。まあ、会いたいか会いたくないかと言われれば…》

斉《またリンってばー。素直に未来の義》

リ《違わい！》
斉《あれれ～、何が違うのかな～》
リ《ぐぬぬ》
な《未来の義って何？》
大《それはな、未来の義理のいも》
リ《わーわーわー》

「おい、各務原。早く降りないと電車が出るぞ」
「え？わー、待って！降ります、降りまーす！」
各務原がラインに夢中になっている間に電車は駅に着いており、ホームから呼びかけると各務原は慌てて降りて来る。
「むぅー、おいて行くなんてひどいよ八幡君」
「いや、ちゃんと到着のアナウンスはあったぞ。聞いてない方が悪いだろう」
「いじわるいじわる！」
歩きながら改札に向かう俺の背中を各務原はポカポカと叩く。
……誰だ？今「砕け散れ」とぼそっと呟いた奴は。

そんな事を言ってると目が腐るから止めた方がいいぞ、ソースは俺。

ー◇◆◇ー

放課後

下駄箱で靴を履き替えていると志摩と斉藤、そして野クルのメンバーが俺を待っていた。

「さあ、行こうぜ！」

「おおーー！」

大垣の号令に各務原と犬山が応え、斉藤はニコニコとしており、志摩はそっぽを向いているが帰るつもりはないらしい。

「何が面白いんだか」

どの道、逃げられそうにもないので諦める事にした。

後、行き成り連れて帰るのも何なので一応小町に連絡を入れておく事にしよう。

「小町」

『なーに、お兄ちゃん』

「今日はちょっと何人か連れて帰る事になったから」
『キャンプ仲間の女の人？』
「…そうだけど、男友達だとか思わないのかな？」
『男の友達いるの？』
「いないけどさ」
『じゃあ、いいじゃん』
「とにかくそーいう事だから」
『りょーかーい。おもてなしの準備しとくね』

小町との通話を終え、校門に目を向けると各務原達は揃って俺を待っていて、溜息を付きながら歩き出すと皆は俺の後を付いて来る。
「じゃあ、八幡君の家に向かってしゅっぱぁーーつ！」
止めて止めて、そんなに大声で叫ぶとほら、周りの皆がこっちを見て来る。
その内の何人かの男達の目はすでに腐り始めていた。
……俺の所為じゃないからね。

―◇◆◇―

「初めまして！お兄ちゃんの妹の比企谷小町です！」
家に着くなり、小町は満面の笑顔で挨拶をする。
「うん、あたしは各務原なでしこです。よろしくね、小町ちゃん！」
「私は志摩リンです。よ、よろしく」
「初めまして、小町ちゃん。私は斉藤恵那、よろしく」
「野外活動サークル、通称「野クル」部長の大垣千明だ。よろしく」
「同じく野クルメンバーの犬山あおいや。よろしくな～」
「じゃあ、お茶の準備してるんで上がってください」
そう言って小町は今俺が住んでる爺ちゃんの家へと皆を案内する。
見た目は古い平屋建てだが、中身は色々リフォームされていてトイレも水洗だ。
「あれ、ご両親はいないの？」
「お袋達は千葉の実家だ。此処は元々爺ちゃんの家だが体が弱った事もあって今は叔父さんの所にいる。その後事情があって俺が一人で住んでるんだ」
「だって、残念だったねリン。挨拶出来なくて」
「だからお前は一々余計な事を…」
そんな会話をしていた時、小町がとんでもない事をぶっこんだ。
「ところでさあ、お兄ちゃん。誰が小町のお義姉ちゃんになるの？」

「ぶほファッ！」
　丁度お茶を口に含んだ所だったので噴出す際に気管に入ってしまった。
「げっほ、がはげふごはぁっ！」
「大丈夫？お兄ちゃん」
「お、おま…、げほげほ、お前なぁ、なんちゅー事を…」
「へ？小町何か変な事言った？」
　小町はワザとなのか天然なのかこてんと不思議そうな顔をして小首をかしげる。
（お兄ちゃんに任せておいたら〝また〟何時まで経っても関係が進行しないからね。雪ノ下さん達には悪いけど小町はお兄ちゃんの味方をするから）
「お姉ちゃん？えへへ～、お姉ちゃんか～。わたし妹が欲しかったんだ～」
「なでしこ、そこはお前の思っているお姉ちゃんではなくたぶんお義姉ちゃんだと思うぞ」
「え？どう違うの？」
「あ～～～…」
「かわええな～。なでしこちゃんはそのまんま、なでしこちゃんのままでええで～」
「え、何？何なの？」
　大垣は頭を抱え、犬山は各務原の頭を微笑ましそうに撫でている。

（おねえちゃん、おねえちゃん…、お義姉ちゃんかぁ）
「ガンバだよリン！一番その場所に近いのはたぶんリンだから」
「う、うるせーやい！」
　志摩と斉藤は何やらヒソヒソ話をしているが、聞こえない方が幸せな気がする。
「お兄ちゃん、夕焼けが綺麗だよ。裏庭でお喋りしない？」
「裏庭？裏庭まであるのか、この家」
「うん、広いんだよ。子供の時なんかよくテントを張って遊んでたの」
「そいつは…、聞き捨てならねーな」
　小町が裏庭の事を話すと大垣はニヤリと笑みを浮かべる。
「お前、何を考えてる」
「ま、いーから、いーから」
「えーから、えーから」
「どうしたの？あきちゃん、あおいちゃん」
　不思議がる各務原を連れて、大垣と犬山は靴に履き替えて裏庭へと移動する。
「各務原さん達も来て下さい」
「リン、行ってみようよ」
「お邪魔します」

「何なんだよ、まったく」
志摩と斉藤も小町に連れられて行き、俺も溜息を付きながらも付いて行く。

ー◇◆◇ー

裏庭に行けば皆が皆、「ほ～～～」と溜息を付いていた。
爺ちゃん家の裏庭はあと一軒は建てられる程に広い。
その分、草刈が大変だけどな。
「懐かしいな。子供の頃遊びに来た時以来だよ」
「天気が悪くてキャンプに行けなかった時、泣きじゃくる小町を慰める為に爺ちゃん達が此処にテントを張ってくれたっけ」
「泣いてたのはお兄ちゃんもじゃない」
「そーだっけか？」
「もーーー！」
俺達がそんな言い合いをしていると裏庭を一通り歩き回っていた大垣が両手を広げて叫ぶ。
「いいねぇ、テントを貼れる広々とした場所、そして直ぐ隣には電気水道にトイレまで完備されている比企谷の家。よぉーーーし、今日より此処を野クルの合宿場とする！唆る

ぜ、これは！」

＝野クルは合宿場を手に入れた＝

「唆るな！手に入れるな！」

「えーー、良いじゃん」

「良くねぇよ！そもそも俺は野クルのメンバーじゃねえ！」

「あれ、そーだっけか？」

「そーだよ！」

俺と大垣が噛み合っていると各務原は赤い顔で駆け出しながら言って来る。

「八幡君！ちょっとトイレ借りるね」

「え？トイレって…。ま、待って各務原」

手を伸ばしてそう言うが、各務原は止まる事無く走って行く。

「待てなーーい、漏るーーーー！」

指し伸ばした手が空しく空を切り、家の扉がガチャリ、バタンと音を立てる。

「ねえ、何であの娘一人暮らしの男の家のトイレに躊躇無く入れるの？漏るーーとか平気で言っちゃうし」

「なでしこだからなー」

「なでしこちゃんやからなー」

「なでしこだから仕方ない」
「仕方ないな～、なでしこちゃんは」
いや、仕方ないじゃないだろう。
見知った女の子が自分が使っているトイレで用を足し、その後で自分が用を足すなんてちょっと色々と……なんだろう。
「大丈夫だよ、お兄ちゃん」
「小町…、大丈夫って何が？」
「なでしこちゃんの前に小町が一回リセットしてるから」
リセット、つまり小町が先にトイレを使ってるから直接俺の後じゃないって事か。
それならギリギリ中のギリギリでセーフ……で良いのかな？
「あ～～、でもさっきお花を摘んだばかりだからなでしこちゃんの後はお兄ちゃんになるのかな」
「全然大丈夫じゃないじゃねぇかーーーーーっ！」
そんな俺の叫びは空しく響いて消えた。

そして夕方、小町を迎えに来る筈の親父は朝、会社に遅刻した事もあり残業となった

為にタクシーで帰る事となった。
　ちなみにタクシー代は親父の小遣いから消えるらしい。
「今度はいっぱい遊ぼーね、小町ちゃん」
「うん、約束だね、なでしこちゃん」
「何時でも来ていいからな小町」
「はい、また来ます。大垣さん」
「あたしらが撮ったキャンプの写真とか送るからな、小町ちゃん」
「楽しみにしています、犬山さん」
「じゃあこれ、お土産にちくわの写真」
「わぁ～～、可愛い！じゃあ小町もカマクラの写真あげます」
「うう～、ニャンコも可愛いなぁ」
「あー、私にも見せて！」
「私も」
「あたしにも見せてーな」
　野クルメンバーが斉藤のスマホを覗き込んでいると小町が志摩を手招きして何か話かけている様だが、あいにく小声なので聞こえなかった。
「何？比企……小町ちゃん」

「あの～リンさん。お兄ちゃんは色々とアレだから苦労すると思うけど…、（がんばってね〃お義姉ちゃん〃）」
「んなっ！」
「あはは」
そして小町は手を振り、タクシーは一路千葉へと走り出した。
「またねー」と手を振って見送る野クルメンバーと斉藤。
志摩は何故か俺の方をチラチラと見て来る。
「…何だよ」
「にゃんで…、げふん！何でも…ないよ」
そう良いながらそっぽを向く。
小町の奴、志摩に何言ったんだよ。

閑話3「スーパーカブのすれ違い2」

『比企谷様ですか。ご注文の品が届きました』
「ありがとうございます。明日、取りに行きます」
『お待ちしています』
いい加減寒くなったのでカブにウインドシールドを付けようと倉庫の中を探してみたのだが肝心のそれは壊れていた。
どうやら爺ちゃんの引越しの際に外しておいたウインドシールドの上に荷物を置いてしまったらしい。
ならば買い直そうとあちこちの店を探したのだが生憎どこの店も売り切れだったが、なんとか中央市の店舗で取り寄せる事が出来たのだ。
「ともかくこれで寒さに問題なくカブで走れるな」
以前、爺ちゃんに言われた通りにすっかりとキャンプの魅力に取り付かれてしまったが、同時にスーパーカブの魅力にも取り付かれてしまい、キャンプに行けない平日などもカブであちこち走っているまである。

ただ、季節が季節だけに寒さに耐えるのも限界だったのだ。
「最近は近場しか走れなかったが、明日からは久しぶりに遠出をしてみるか」
ああ、楽しみだ。

翌日、授業が終わると俺は速攻で教室を後にし、奴に捕まる前に何とか靴を履き替え、校門を飛び出した所で「八幡くーーーん」と各務原の声が聞こえた、…危ない所だった。
すぐにでも店に行きたかったが、生憎とこの高校はバイク通学が禁止な為に家まで帰らなければならずこの時間が煩わしい。
ようやく家に帰り着き、着替える時間も勿体無いので財布だけを持ってスーパーカブに乗り込む。
待っていろよ、ウインドシールド！

ー◇◆◇ー
??～
此処最近はすっかりと寒くなり、まるで氷の中を走っているようだった。
小熊はウインドシールドを取り付けるかと悩んでいたが私のハンターカブにあんな

カッコ悪い物は付けたくなんかなかった。
…だけどいざ知り合いのウインドシールド付きのカブに試乗してみたらそんな考えは吹き飛んだ。
機能美という言葉があるように見た目より実用性が大事である。
すぐに在庫を取り寄せてもらい、今日さっそく取り付ける為に買いに来た。
「お待たせしました、こちらがご注文の品です」
「わぁ～～」
「来た来た、これよこれ」
受け取ったウインドシールドを手に、小熊と二人で浮かれていると他の学校の生徒なのかブレザー姿の男性が入って来て、さっきまで私達がいたレジに駆け寄った。
「すみません、注文していた比企谷ですが」
「あ、お待ちしていました。こちらがご注文の品です」
「おお～、ありがとうございます」
お、偶然ね。
彼が受け取ったのも私達…と言うより小熊と同じスーパーカブ用のウインドシールドだった。
「さてと、さっそく取り付けるか」

何と言うか…その…そう、独特な目つきの彼はウキウキ顔でそう言いながらこっちに来ると小熊は不思議そうな顔で彼を見ていた。
「どうしたのよ？」
「あっ、あのっ…」
「ん？」
＝小熊は思わず再会した八幡に話しかけてしまった＝

ー◇◆◇ー
～八幡
「あっ、あのっ…」
さっそくウインドシールドを取り付けようとカブを停めている駐車場に向かおうとすると小柄な女の子が話しかけて来た。
俺の事を知っているのか？
そういえば見覚えがあるようなないような……
「おやおや～小熊先生、何時の間に男の人とお知り合いに？いや～冬だというのに青い春ですな～」

「違う。後礼子、普通にうざい」
一緒に居た長い黒髪の女はどこかのラノベの駄女神みたく「プークスクス」と口に手を当てて笑っている。
それよりもこの女の子、何処で会ったんだっけ？
「ほら、前に礼子にも見せたスーパーカブの写真。あれはこの人のスーパーカブ」
「ああ！あの」
写真に俺のスーパーカブ……、あの時か！
高ボッチ高原からの帰り道のスーパーで俺のカブの写真を撮っていた女の子か。
いかん、思い出したらあの時の俺を殴りたくなってきた。
すみません八世殿下、タイムワープ教えて下さい。
「へぇ～、貴方が小熊が言ってたキャンパー君か」
「…キャンパーなんてご大層なものじゃない。ただ、キャンプが好きなだけだ」
「十分キャンパーだと思うけど…ま、良いか」
そう言うと顎に手を当て、礼子と呼ばれた女はニヤニヤしながらこっちを見て来る。
「…とりあえず俺はこのウインドシールドを早く取り付けたいんだが」
「奇遇ね、私もよ」
「私〃達〃」

「はいはい、私達私達」
「う～～～」
　何なんだろう?
　俺はこの娘達が何をしたいのかがよく分からない。
「じゃあ、そういう事で」
「あっ、ちょっと待ちなさいよ」
「待って」
　店を出て、カブを停めている駐輪場に行くと彼女達も付いて来る。
　どうやら俺が来た時に止めてあった二台のカブは彼女達の物だったらしい。
「さてと」
　さっそく、作業を始め取り付けたウインドシールドに不備が無いかを確認していると礼子と呼ばれていた女の子が近づいて来た。
「取り付けと確認が終わったら私達のも確認してよ」
「……何故に?」
「それぞれお互いに確認しあえば自分じゃ気付かなかった不備が見つかるかもしれないでしょ」
「まあ、確かにそうだが…」

「じゃあ、あなたのカブは私が見るから私のカブをよろしく！」
「ちょっと待て礼子、それじゃ私だけ後回しになって二度手間になる。だから礼子のは私が見て彼は私のを見るべき」
　いや、俺はさっさとカブで走りに行きたいんだけど。
「はいはい、『他の女に目をくれないで私だけを見て！』って事ね」
「違う！」
「まあ、そういう事にしといてあげるわ。さ、まずは小熊の方から見てあげて」
　礼子と呼ばれた女の子はそう言うと俺のカブの点検を始める、なんかグイグイ来るなこの娘。
　何時もならしどろもどろになる所だが、あまりの勢いに１８０度どころか５４０度回って冷静になるまである。
　小熊という娘も彼女の赤いカブの点検を始めていた為、今更遠慮しますなどと言えない空気だ。
「良し！三台とも問題無しね」
　それぞれが自分のカブと別の二台ずつ点検した所、不備は見つからず問題は無かった。
　やれやれ、ようやく開放されるか。

カブに跨り、エンジンを掛けようとすると…
「ねえねえ、キャンプってどんな感じなの？」
と、礼子とかいう女の子が目をキラキラさせながら話しかけて来る。
「ど、どんな感じかと聞かれてもな、俺がやってるのはボ…ソロキャンだからテントの設営も焚き火や食事の準備、そして帰る時の後始末なんかも全部自分でやらなきゃならないからかなり面倒だぞ。まあ、それだけの事をする価値はあるけどな」
「へぇ～～」
「ほぉ～～」
そう言うと二人共向き合ってあれこれ話し合っている。
やった事は無いがキャンプ自体に興味はあるらしい、というより今がチャンスだ！
ブロンッ！
「あっ！ちょっと！」
「後は自分達で調べろ」
これ以上拘束されてはたまらないとキック一発でエンジンを始動させ、止められる前に走り出す。
おお、ちょっと走っただけでも今までとは段違いだ。
全然寒くない、ウインドシールドマジ最高！

「まあ、色々と強引な奴等だったが不思議と嫌な感じはしなかったな」
以前の俺だったら近づいて来た時点であれこれ言いながらさっさと逃げ出していただろうがな。
やはり志摩や各務原達との関わり合いが影響してるんだろう。
「それはそれとして、風n……」
風になるぜ！と叫ぼうとしたら何やら多国籍国家っぽい店の前で掃除をしている女の子が怪訝な表情でこっちを見ていた。
……風じゃなく貝になりたい。

ー◇◆◇ー

??～
もっと色々と聞いてみたかったが彼はさっさと逃げる様に走り去ってしまった。
まあ、お互いカブに乗ってるんだからまたどこかで会えるかもねってそれより……
「なに露骨に残念そうな顔してるのよ」
「別に……」